中世都市鎌倉以前

東の海上ルートの実相

平川 南

The Time before the Establishment of the Medieval City of Kamakura: the Real State of the Eastern Sea Route

はじめに
❶三浦半島における四世紀古墳の発見
❷古東海道
❸地方豪族の地域間交流
❹墨書人面土器の受容ルート
むすびにかえて

[論文要旨]

中世の幕府は、なぜ鎌倉の地に設置されたのか。おそらくは、鎌倉の地を経由する海上ルートは、中世以前に長い時間をかけて確立されてきたものと想定されるであろう。小稿の目的は、この歴史的ルートを検証することにある。

最近発見された、三浦半島の付け根に位置する長柄・桜山古墳は、三浦半島から房総半島に至る四～五世紀の前期古墳の分布ルートを鮮やかに証明したといえる。また、八～九世紀には、道教的色彩の強い墨書人面土器が、伊豆半島の付け根の箱根田遺跡そして相模湾を経て房総半島の〝香取の海〟一帯の遺跡群で最も広範に分布し、さらに北上して陸奥国磐城地方から陸奥国府・多賀城の地に至っている。また古代末期の史料によれば、国司交替に際しても、相模―上総に至る海上ルートが公的に認められていたことがわかる。

このルートは『日本書紀』『古事記』にみえるヤマトタケルの〝東征〟伝承コースと符合する。これは古東海道ルートといわれるものである。

上記の事例の検討によって、ヤマトから東国への政治・軍事・経済そして文化などの伝来は、古墳時代以来伊豆半島・三浦半島・房総半島の付け根と海上を通る最短距離ルートを活用していたことが明らかになったといえる。

この西から東への交流・物流の海上ルートの中継拠点が鎌倉の地である。中世の鎌倉幕府は、そうした海上ルートの中継拠点に設置され、西へ東へ存分に活動したと考えられる。

はじめに

鎌倉幕府はなぜ〝鎌倉の地〟に設置されたのであろうか。

源頼朝の挙兵から鎌倉に本拠を定めるまでの経緯は、一般的には次のように説明されている。[1]

『吾妻鏡』によると、以仁王の令旨が治承四（一一八〇）年四月に伊豆の北条の館にもたらされ、源頼朝は北条時政とともに挙兵した。伊豆国は以仁王の乱後、検非違使別当であった平時忠の知行国とされ、目代には平氏一門の平兼隆が任ぜられた。頼朝は目代平兼隆を伊豆一宮の三島社の祭礼の日を狙って滅ぼすと、相模の三浦氏の後援を得て鎌倉に入ることを目指し、伊豆・相模の御家人を率いて伊豆を出た。しかし三浦氏と合流直前に相模の石橋山で平氏軍の大庭景親に大敗してしまった。そこで真鶴半島から脱出して海路をとり、房総半島へ逃げ込んだ。その行動は東京湾の周囲の勢力を頼ったものであり、この湾岸の安房・上総・下総と相模・武蔵の五カ国は東海道四カ国（駿河・伊豆・相模・武蔵）と同様に武士間の濃密な交渉があったのである。房総地域は、頼朝の父義朝が活動していたところでもある。こうして頼朝は東海道四カ国と東京湾岸諸国の南関東一帯の武士たちから主人として認知を受け、ここに〝東国の主〟として君臨する基礎を築いた。

頼朝は十月六日に相模に入り、翌七日には鎌倉に到着した。鎌倉は先祖の頼義が北条時政の先祖である平直方から譲られた由緒の地であった。また父義朝は三浦氏をバックにして亀谷に館を構えていたことがある。そうした由緒とともに、鎌倉が三方を山に囲まれ前方が海という要害の地であったことから、ここに居を占めることと定め、伊豆に逃れていた妻の政子を迎え、由比の八幡を小林郷に遷して鶴岡八幡として祀った。ここに「鎌倉殿」という幕府政権の核が形成されたのである。

以上のような頼朝の挙兵から鎌倉占地までの経緯をみても、伊豆―相模―房総という海上ルートとその中核的位置の鎌倉周辺の関係はこの時点で突如生まれたものではなく、長い歴史のなかで確固として形成されてきたルートであることが想定されるであろう。

鎌倉は東西北の三方を一〇〇m前後の丘陵に囲まれているが、平野部は丘陵際から海側へと単になだらかに傾斜しているのではなくかなりの起伏がある。また、由比ヶ浜も遠浅の海に面して、波が荒いという理由から、港としての適性が低いとみなされている。しかし斎藤直子氏の検討[2]によれば、当該期の鎌倉は、砂丘（砂洲）という天然の防波堤に守られた良港を有していたという。貞永元（一二三二）年、鎌倉幕府は由比ヶ浜の南東に和賀江島という人工の防波堤を築かせた。この辺りは南西から寄せる波の厳しい海岸であったが、この築島により、新たな泊地を造成したのである。和賀江島の築港によって、付近は和賀江津、あるいは飯島津とよばれ、米や材木、あるいは中国からの輸入品等々の陸揚げ港として繁栄した。このように和賀江島・飯島を中心とする鎌倉の港湾は、国の内外との貿易拠点として大きな役割を果たしていた。まさに当時の鎌倉港は中国―北九州―鎌倉―陸奥、夷の島へという海上交通路の重要な拠点の役割を果たしていた。

斎藤直子氏は、さらに次のように海岸線の変化を分析している。[3]

由比ヶ浜辺りの相模湾岸では、おおよそ西から東へと漂砂（海浜において波や流れによって運搬される砂）が移動していることが知られている。由比ヶ浜沿いに西から東へと運ばれた漂砂が和賀江島のところでせき止められ、その付近から順次西側へと漂砂が堆積したとみられる。和賀江島が築かれたことが由比ヶ浜の海岸地形を変化させ、港湾機能の低下を招いた。そして由比ヶ浜の地形変化によってしだいに鎌倉の東、東京湾を臨む所に位置した六浦の港湾としての役割が高まったとみられている。史料のうえでは「六浦津」の名は、『吾妻鏡』の寛喜二（一二三〇）

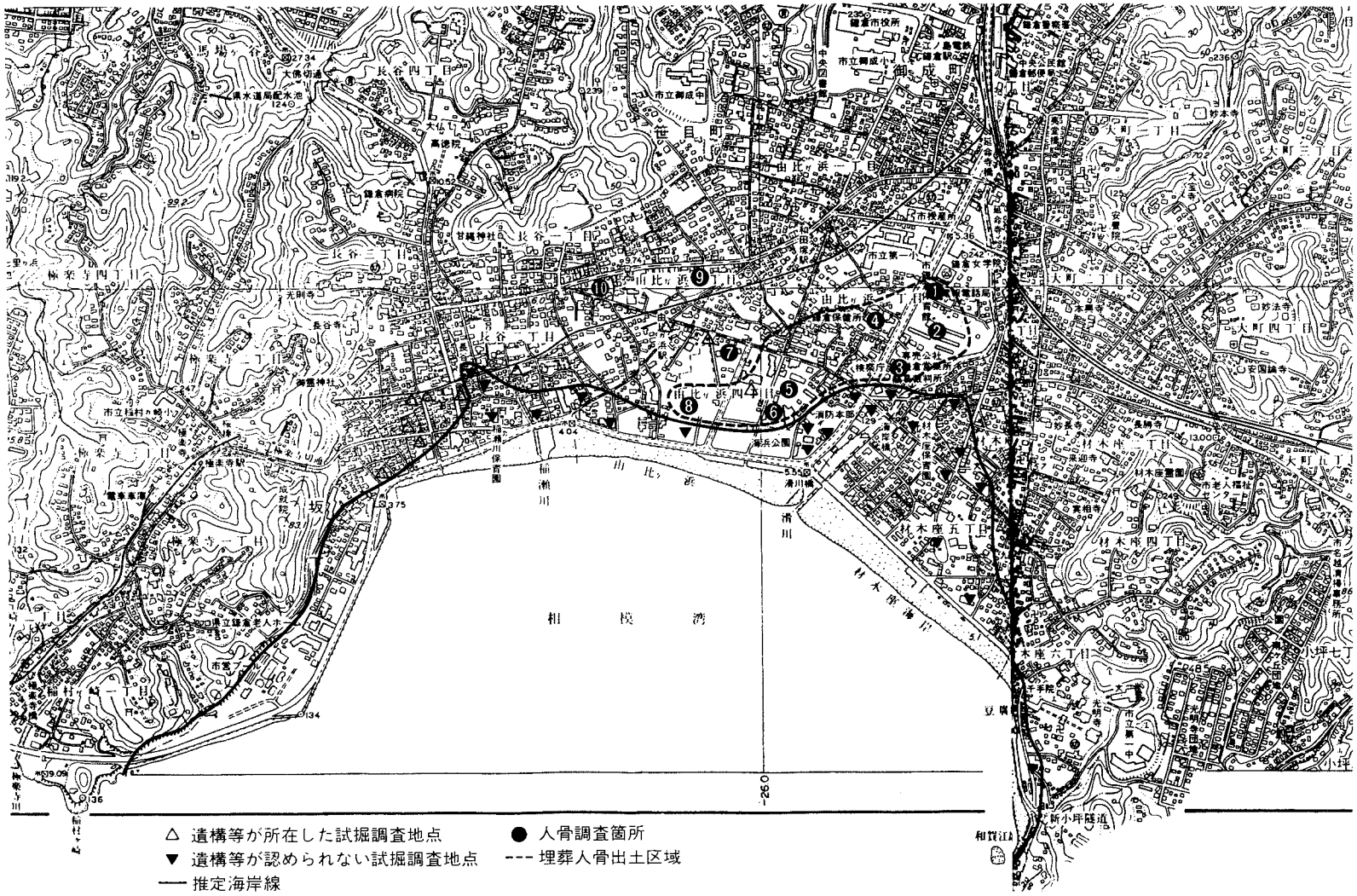


図1　中世の推定海岸線と調査地点（石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世3―武士の都鎌倉』1989年）

年の条に確認できるが、仁治年間（一二四〇～四三）の六浦道開削により急速に発展したとみられている。『沙石集』（鎌倉中期の説話集）に「鎌倉通テ、六浦と云所ニテ、便船ヲ待テ、上総へ越ントテ（云々）」とあるように、金沢称名寺の年貢輸送ともあいまって、十三世紀において六浦を拠点に鎌倉―三浦半島―房総半島を結ぶ廻船が展開されていたのである。[4]

以下、小論では、近年の発掘調査の成果を十分に踏まえて、鎌倉の地を含め従来個別に取り扱われてきた相模湾を経由する政治的・軍事的・経済的・文化的交流ルートを総体的に整理・考察してみることとする。とくに古墳時代以来の東西海上ルートの歴史的展開をそれぞれの課題に対する諸氏の研究に依拠しながら、多角的に検討し、このルートが歴史的に様々な交流の重要な経路であり、鎌倉の地がその中核的役割を果たしていたことを裏付けてみたい。

❶三浦半島における四世紀古墳の発見

長柄・桜山一号・二号墳[5]

一九九九年、神奈川県逗子市と葉山町境の丘陵上において、大規模な前方後円墳二基が発見され、「長柄・桜山古墳」と名付けられた。両古墳は、相模湾と東京湾を画する三浦半島の付け根付近、桜山丘陵と称される東西に延びる標高五〇～一二〇ｍの低丘陵上に立地する。一号墳は海岸線から約一㎞内陸部に築かれ、後円部墳頂からは眼下に逗子市街、東方には東京湾が見渡せる。二号墳は海岸線より約五〇〇ｍ内陸部に築かれ、前方部先端からは西方に相模湾、江ノ島を眺望できる。

一号墳は約九〇ｍの墳丘長をもつ前方後円墳で、墳丘上には石を葺かず、主に岩盤を削り出して整形された墳丘であった。遺物は一号墳でくびれ部より壺形埴輪などが、後円部では突出部の高いタガをもつ定型化した円筒埴輪・朝顔形埴輪も出土した。二号墳は泥岩を主体とした葺石を持っている。葺石は特に前方部で多く、海に面する部分を意識した配置も想定される。二号墳では円筒もしくは朝顔形が一部含まれるが、東日本の前期古墳に特徴的な壺形埴輪が多く出土した。

長柄・桜山一・二号墳にみられる、こうした壺形埴輪と円筒埴輪・朝顔形埴輪の併用は東日本の前期古墳、とくに埴輪受容期の東日本の古墳によく見られる現象であるという。

こうした埴輪のあり方は、静岡県磐田市松林山古墳、山梨県中道町銚子塚古墳など、ひろく東日本各地の初期の大型前方後円墳にみられる現象であり、少なくとも長柄・桜山二号墳は、これらの古墳の埴輪の様相にきわめて近いものが認められる。その時期は、四世紀の中葉頃と考えて大過ない。一号墳はそれに続く四世紀後半のものとみられている。

この長柄・桜山一・二号墳の意義について、白石太一郎氏は以下のように分析している。[6]

最近では東海・中部山岳・北陸・関東など東日本各地では、古墳時代前期前半にさかのぼる顕著な古墳は、ほとんど全部前方後方墳であり、それが前期後半になると前方後円墳に転換する。

長柄・桜山一・二号墳は、まさにこの前方後方墳から前方後円墳への転換期のものと考えて差し支えなかろう。そして、長柄・桜山二号墳には、ほかのこの時期の東日本の大型前方後円墳と同じように、東日本の伝統的な葬送祭祀に用いられた土器の流れをひく壺形埴輪とともに、西日本的な埴輪がみられることは、その背後にヤマトの勢力とのより堅固な関係が成立していたことを示す。

四世紀中葉の東日本各地にみられる前方後方墳から前方後円墳への転換は、ヤマト政権の版図が東北地方にまで拡大したことにともない、畿内と東北をつなぐ東日本地域の重要性が増大した結果と考えられている。

さらに報告書[7]では、墳丘規模における百分比において、長柄・桜山一・

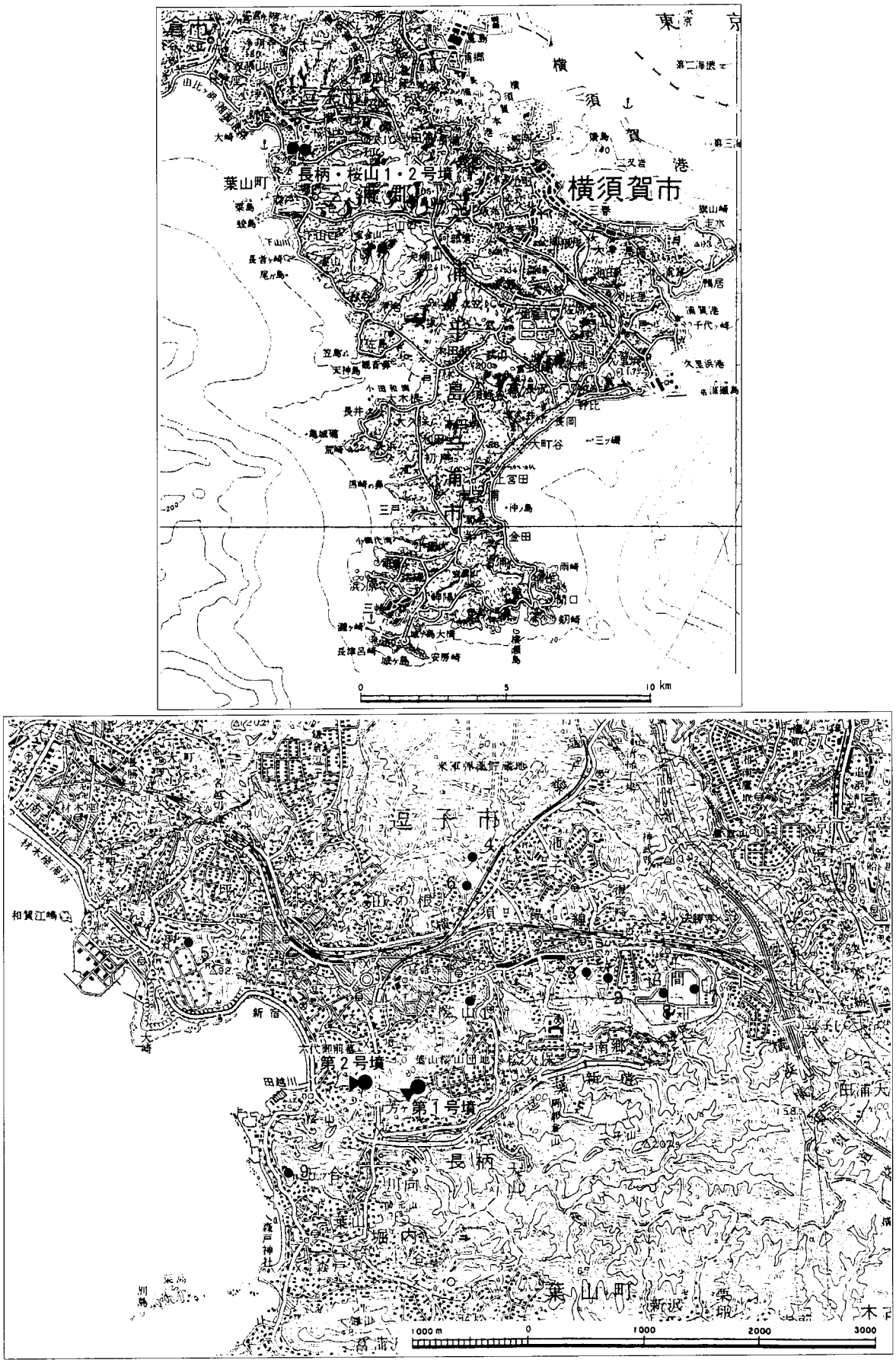


図2　三浦半島　長柄・桜山1・2号墳

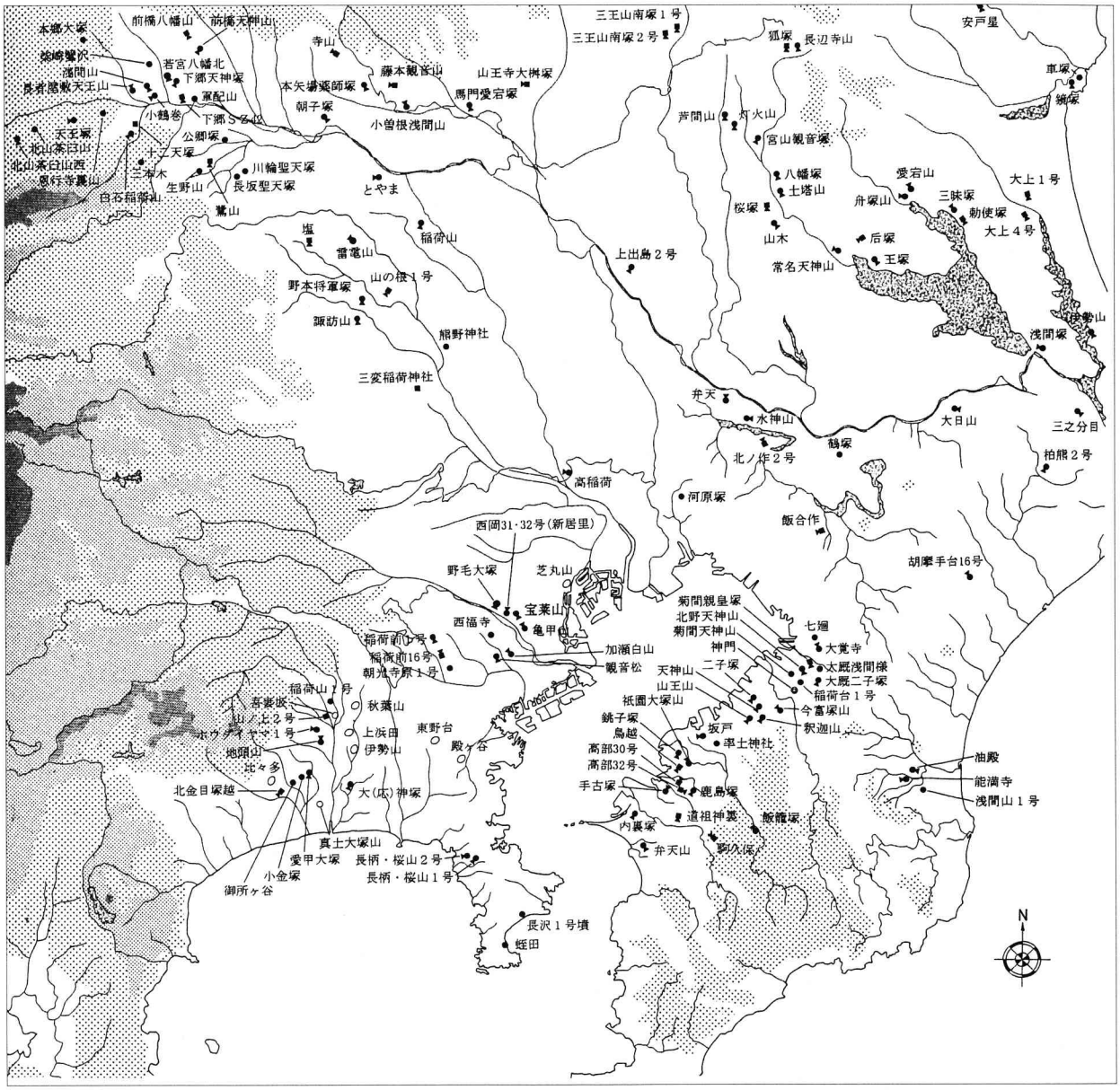


図3　関東地方主要前半期古墳位置図（『長柄・桜山第1・2号墳測量調査・範囲確認調査報告書』より）

二号墳は神奈川県・東京都に所在する古墳より、千葉県などで類例が多くみられるとの興味深い結果も得られている。さらに三浦半島の地形を鑑みた場合、東西の方向に谷が最も奥深く開析されている田越川流域を遡上して東京湾側へ至るコースも、その有力な道筋の一つとして考えられようと指摘している。

奈良時代以前の古東海道は、相模の国府から三浦半島を経て、走水を渡り上総に至るものであった。房総半島では、三浦半島の対岸の東京湾岸に、南から千葉県富津市の小糸川・湊川の下流の内裏塚古墳群、小櫃川下流の木更津市長須賀古墳群、さらに養老川下流の市原市姉崎古墳群などに、規模も大きく、またすぐれた副葬品をもつ有力な古墳が多数造営されている。このことは、古墳時代の東への幹線ルートである古東海道が、三浦半島の西の基部から東京湾を渡り、上総のこの付近を経由していたことを示しているとみられているのである。

❷古東海道

『古事記』『日本書紀』のヤマトタケル伝承にみえる東征ルートは、古代の道を反映したものと判断できる。(8)

『古事記』景行天皇段

爾くして天皇、亦、頻りに倭建命に詔はく、「東の方の十二の道の荒ぶる神とまつろはぬ人等とを言向け和し平げよ」とのりたまひて、吉備臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて遣しし時に、ひひら木の八尋矛を給ひき。（中略）

故爾くして、相武国（さがむのくに）に到りし時に、其の国造、詐りて白ししく、「此の野の中に大き沼有り。是の沼の中に住める神は、甚だ道速振る神ぞ」とまおしき。是に、其の神を看行さむとして、其の野に入り坐しき。爾くして、其の国造、火を其の野に著けき。故、欺かえぬと知りて、其の姨倭比売命の給へる嚢の口を解き開けて見れば、火打、其の裏に有り。是に、先づ其の御刀を以て草を刈り撥ひ、其の火打を以て火を打ち出して、向ひ火を著けて焼き退け、還り出でて、皆其の国造等を切り滅して、即ち火を著けて焼きき。故、今に焼遣（やきつ）と謂ふ。其より入り幸して、走水海（はしりみず）を渡りし時に、其の渡の神、浪を興し、船を廻せば、進み渡ること得ず。爾くして、其の后、名は弟橘比売命、白ししく、「妾、御子に易りて、海に入らむ。御子は、遣さえし政を遂げ、覆奏すべし」とまをしき。海に入らむとする時に、菅畳八重・皮畳八重・絁畳八重を以て、波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に、其の暴浪、自ら伏ぎて、御船、進むこと得たり。

爾くして、其の后の歌ひて曰はく、

さねさし　相武（さがむ）の小野（をの）に　燃ゆる火の　火中に立ちて
問ひし君はも

故、七日の後に、其の后の御櫛、海辺に依りき。乃ち其の櫛を取り、御陵を作りて、治め置きき。

其れより入り幸し、悉く荒ぶる蝦夷（えみし）等を言向け、亦、山河の荒ぶる神等を平げ和して、還り上り幸しし時に、足柄（あしがら）の坂本（さかもと）に到りて、御粮を食む処に、其の坂の神、白き鹿と化りて来立ちき。爾くして、即ち其の咋ひ遺せる蒜の片端を以て、待ち打ちしかば、其の目に中てて、乃ち打ち殺しき。故、其の坂に登り立ちて、三たび嘆きて、詔ひて云ひしく、「あづまはや」といひき。故、其の国を号けて阿豆麻（あづま）と謂ふ。即ち其の国より甲斐（かひ）に越え出でて、酒折宮に坐しし時に、（中略）。其の国より科野国（しなのくに）に越えて、乃ち科野之坂（しなのさか）神を言向けて、尾張国（おはりのくに）に還り来て、先の日に期れる美夜受比売の許に入り坐しき。

（『新編日本古典文学全集　古事記』小学館、一九九七年）

『日本書紀』景行天皇四十年十月癸丑条

是歳、日本武尊、初めて駿河（するが）に至る。其の処の賊、陽り従ひて、欺

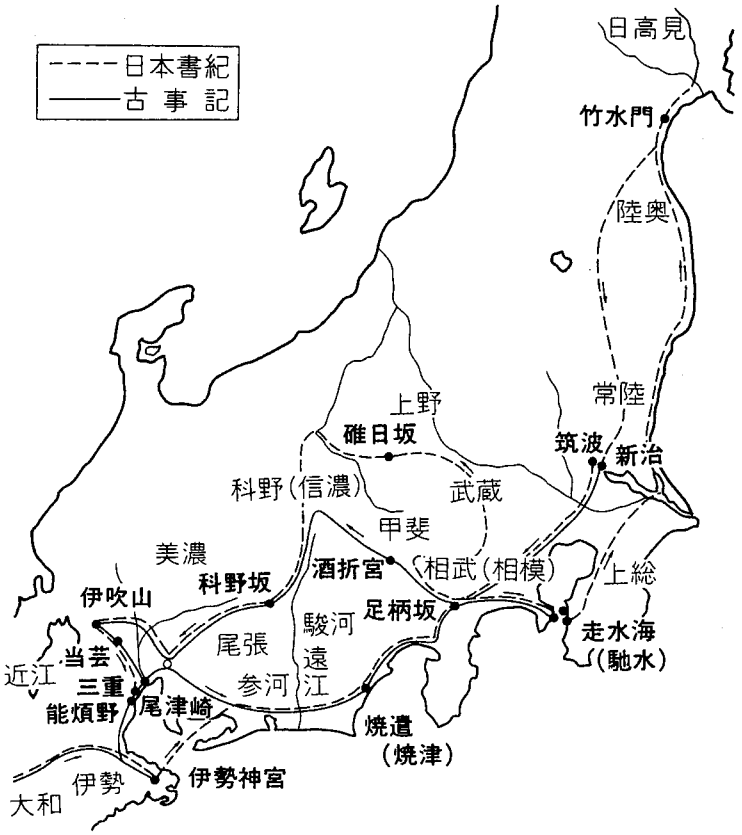


図4　日本武尊東征経路（『静岡県史』通史編1　原始古代 1994年より）

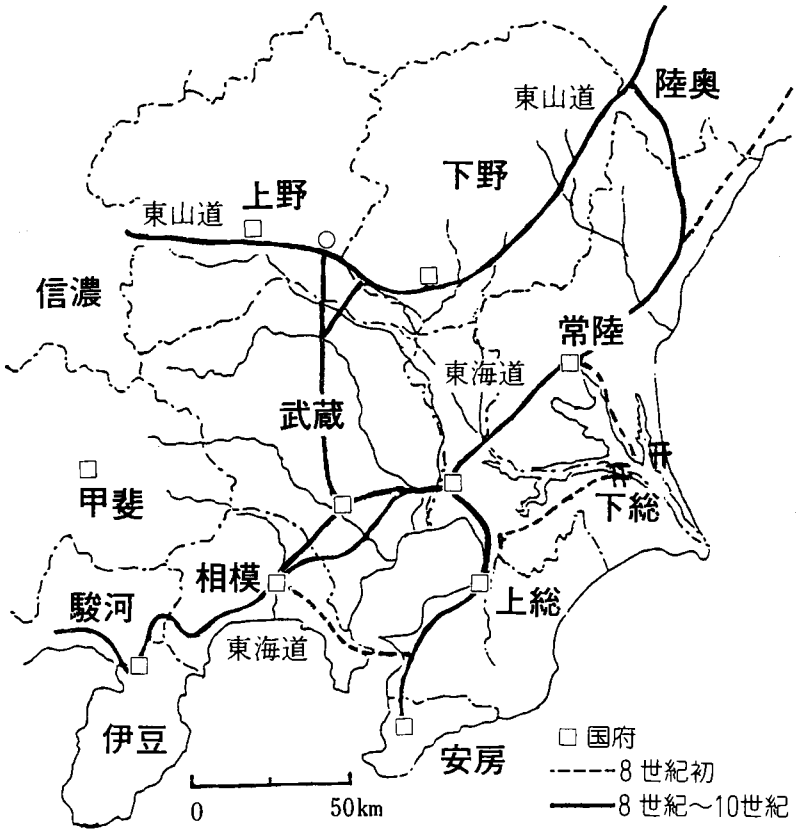


図5　古代東国の交通路（佐々木虔一『古代東国社会と交通』校倉書房　1995年より）

きて曰さく、「是の野に、麋鹿甚だ多し。気は朝霧の如く、足は茂林の如し。臨して狩りたまへ」とまをす。日本武尊、其の言を信けたまひて、野の中に入りて、覓獣したまふ。賊、王を殺さむといふ情有りて王とは、日本武尊を謂ふぞ。其の野に放火焼。王、欺かれぬと知しめして、則ち燧を以て火を出して、向焼けて免ることを得たまふ。一に云はく、王の所佩せる剣、薭雲、自ら抽けて、王の傍の草を薙き攘ふ。是に因りて免ることを得たまふ。故、其の剣を号けて草薙と曰ふといふ。薭雲、此をば茂羅玖毛と云ふ。王の曰はく、「殆に欺かれぬ」とのたまふ。則ち悉に其の賊衆を焚きて滅しつ。故、其の処を号けて焼津と曰ふ。亦相模に進して、上総に往せむとす。海を望りて高言して曰はく、「是小き海のみ。立跳にも渡りつべし」とのたまふ。乃ち海中に至りて、暴風忽に起りて、王船漂蕩ひて、え渡らず。時に王に従ひまつる妾有り。弟橘媛と曰ふ。穂積氏忍山宿禰の女なり。王に啓して曰さく、「今風起き浪泌くして、王船没まむとす。是必に海神の心なり。願はくは賤しき妾が身を、王の命に贖へて海に入らむ」とまうす。言訖りて、乃ち瀾を披けて入りぬ。暴風即ち止みぬ。船、岸に著くこと得たり。故、時人、其の海を号けて、馳水と曰ふ。爰に日本武尊、則ち上総より転りて、陸奥国に入りたまふ。時に大きなる鏡を王船に懸けて、海路より葦浦に廻る。横に玉浦を渡りて、蝦夷の境に至る。（中略）蝦夷既に平けて、日高見国より還りて、西南、常陸を歴て、甲斐国に至りて、酒折宮に居します。（中略）則ち甲斐より北、武蔵・上野を転歴りて、西碓日坂に逮ります。時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有します。故、碓日嶺に登りて、東南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾嬬はや」とのたまふ。嬬、此をば菟摩と云ふ。故、因りて山の東の諸国を号けて、吾嬬国と曰ふ。（中略）信濃に進入しぬ。

『日本古典文学大系67　日本書紀　上』岩波書店、一九六七年）

ヤマトタケルの東征ルートは、両書で差違がある。

『古事記』

駿河→相模→上総→蝦夷の地→相模・足柄坂→甲斐→信濃→尾張

『日本書紀』

駿河→相模→上総→陸奥→日高見→常陸→甲斐→武蔵→上野・碓日坂→信濃→尾張

しかし、駿河→相模→上総そして海路を北上するルートは両書共通する点が重要である。

東海道という名称は、海を渡る経路（海路）のある道に由来すると推定される。東海道の海路は二カ所想定されている。その一は、相模国から上総国へ渡る所である。ヤマトタケル伝承は、その経路を伝えている。令制前の東海道（古東海道）は、相模を通り、馳水（走水）の海を渡り、対岸の富津・木更津へ至る道とされる。(9)

鎌倉には二本の東西道路が走っているが、山際の東西道ともう一つが、南の海岸沿いを通過する道で、いわゆる古東海道である。この道は、稲村が崎方面から入って砂丘地帯を通り、名越から沼浜（現在の逗子市）に抜け、三浦半島に通じていた。

房総半島では、三浦半島の対岸の東京湾岸に、南から千葉県富津市の内裏塚古墳群、小櫃川下流の木更津市付近、さらに養老川下流の市原市姉崎古墳群などに、規模も大きく、またすぐれた副葬品をもつ有力な古墳が多数造営されている。

以下、この地域の古墳の分布とその変遷について、小林三郎氏の分析に基づき概観してみたい。(10)

まず、千葉県市原市国分寺台の神門古墳と呼ばれる三基の古墳は、近畿・瀬戸内系の円丘を基本とし、埋葬儀礼に伴う供献土器として、近畿地方の庄内式土器や東海地方西部、あるいは北陸系の土器群を合わせて保有していることから推して、神門三古墳の被葬者たちは、市原市周辺

を基盤として西日本地域と積極的に交流した東日本の出現期古墳として位置づけられている。つづいて、初期古墳のうち、前方後方墳は君津市駒久保古墳、同市道祖神裏古墳、市原市新皇塚古墳などがあげられる。畿内の政治的勢力波及の表徴とされる前方後円墳として、木更津市の手古塚古墳（全長六〇m）が房総地域における最古期のものとされている。この手古塚古墳につづく市原市姉崎天神山古墳は、全長一二〇mの前方後円墳である。房総地域では東京湾岸に面した小糸川・小櫃川・養老川・村田川の各水系に、古墳時代前半期の定着した古墳の様相を読みとることができ、姉崎天神山古墳はその中心的位置を占めている。そしてやがて小糸川水系に富津市内裏塚古墳（全長一四四m）をはじめとする大型前方後円墳群が登場するのである。内裏塚古墳は、明治三十九（一九〇六）年の調査によって、後円部墳頂に二基の竪穴式石室が発見され、東石室から二体の人骨と刀剣・鉄鏃・鎌・鉇などが、西石室からは鏡・刀剣・槍先・鳴鏑・胡籙・鉇・鉄鏃などの副葬品が確認され、五世紀中ごろの築造とされている。内裏塚古墳につづくのが富津市弁天山古墳（全長八六m）で、五世紀後半とみられている。さらに君津市八幡神社古墳（全長八六m）、富津市九条塚古墳（全長一〇五m）と、同族とされる首長歴代の墳墓として営まれたという。九条塚古墳に次いで稲荷山古墳が六世紀後半に比定され、続いて三条古墳が六世紀末ごろに築造された。

房総地域では、五世紀中葉以後、内裏塚古墳群の被葬者たちに匹敵するほどの規模をもち、豊富な副葬品を誇るいくつかの古墳がある。しかし、それらが内裏塚古墳群のように首長権を連続的に継承したか判然としない。

小櫃川水系では、祇園大塚山古墳は、前方後円墳であったといわれ、金銅製眉庇付冑、金銅製挂甲小札や画文帯四仏四獣鏡などが出土品として紹介されている。眉庇付冑は、仁徳陵古墳からの伝出土もあって、いわゆる大王級の古墳の副葬品として顕著な武具である。金鈴塚古墳は、祇園大塚山古墳と同地域内に築造され、その系譜を継承した首長の墳墓であると思われる。全長九五mの前方後円墳であり、鏡二面のほか装飾付大刀類一七、馬具三組以上、銅鋺五、金銅製履、各種玉類、金鈴・金銀糸を用いた織物、挂甲・衝角付冑などのほか須恵器・土師器二五〇点など、副葬品の質量ともに関東では随一である。

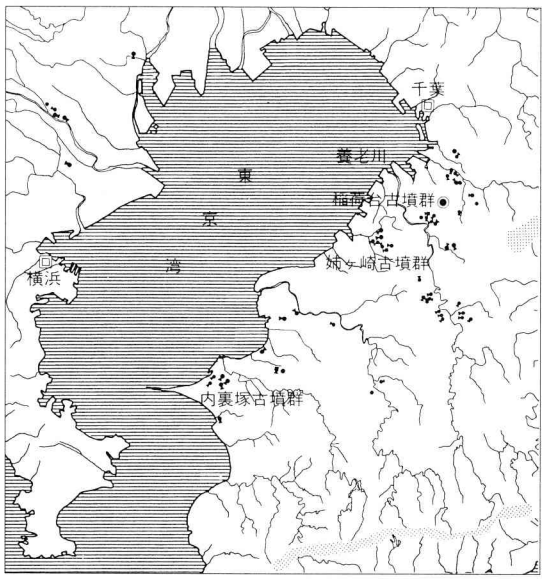
このように、木更津から市原にかけての地域は、古くから畿内政権との結びつきが強く、古墳群の分布でも、早い時期から大規模な古墳が築造された地域である。また、昭和六十二（一九八七）年発見された市原市稲荷台一号墳出土の「王賜」銘鉄剣は、日本列島内で書かれたものとしては最古の銘文をもつ鉄剣である。さらにそれは、ヤマト王権から房総地域の中小豪族に下賜された鉄剣であり、海上交通路がこの地域とヤマト王権を結んでいたことを証しているといえる。

さらに、川尻秋生氏は、古代東国の沿岸交通の分析の中で、特に小論と関係深い伊豆―相模―房総の海上ルートに関して、貴重な成果を明らかにしている。その要旨は以下のとおりである。[11]

『本朝続文粋』巻第六、「奏状、申受領」には散位従五位上大江朝臣時棟が受領任命を希望する申文が含まれている。申文によれば、彼は安房守として任期中の公文を勘済し、受領功過定をパスしたにもかかわらず、次の官職に任命されなかった。そこで、先例を引用しながら自分の功績を書き上げて、寛仁四（一〇二〇）年の春に闕国となる丹後・上野・出羽国のうち、いずれかの受領になることを望んだのである。その申文のなかで、時棟が安房国と三浦半島との間の「水道」の経路の危険性を強調している事実は、国司の離着任に海路が用いられたことを証しているという。

さらに川尻氏は『二中歴』（鎌倉時代初期頃成立）所載の二つの日本図に着目し、次のような興味深い点を指摘している。

日本図Aでは、経路は律令制下に近く、誤りを含むものの、延喜主計



稲荷台古墳群の位置

（表）王賜□□敬安

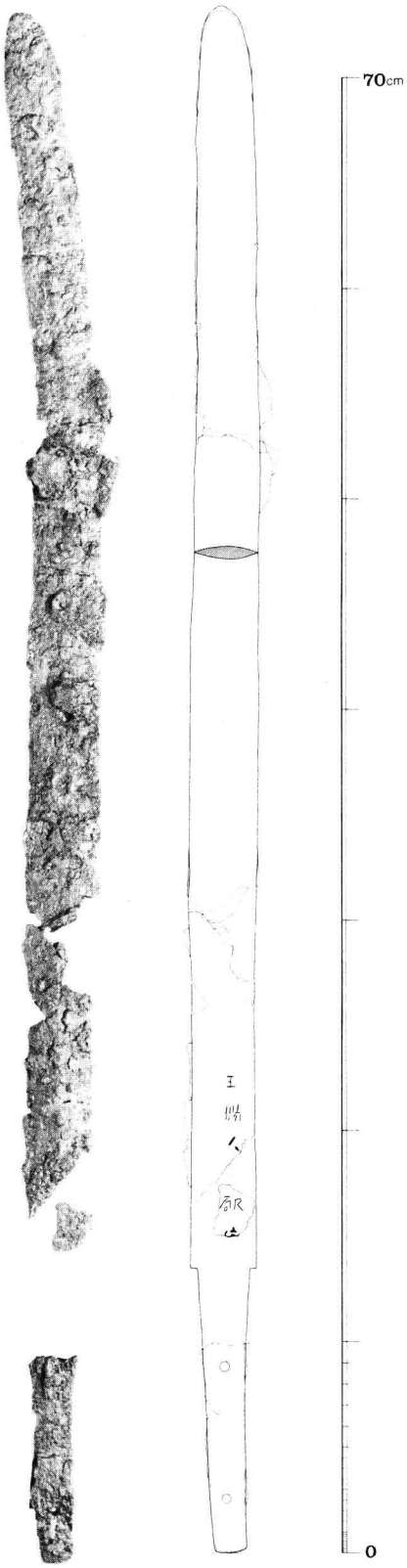
（裏）此延刀□□□

銘文の釈文

（表）王□□（剣の意）ヲ賜フ。敬ンデ安ゼヨ。

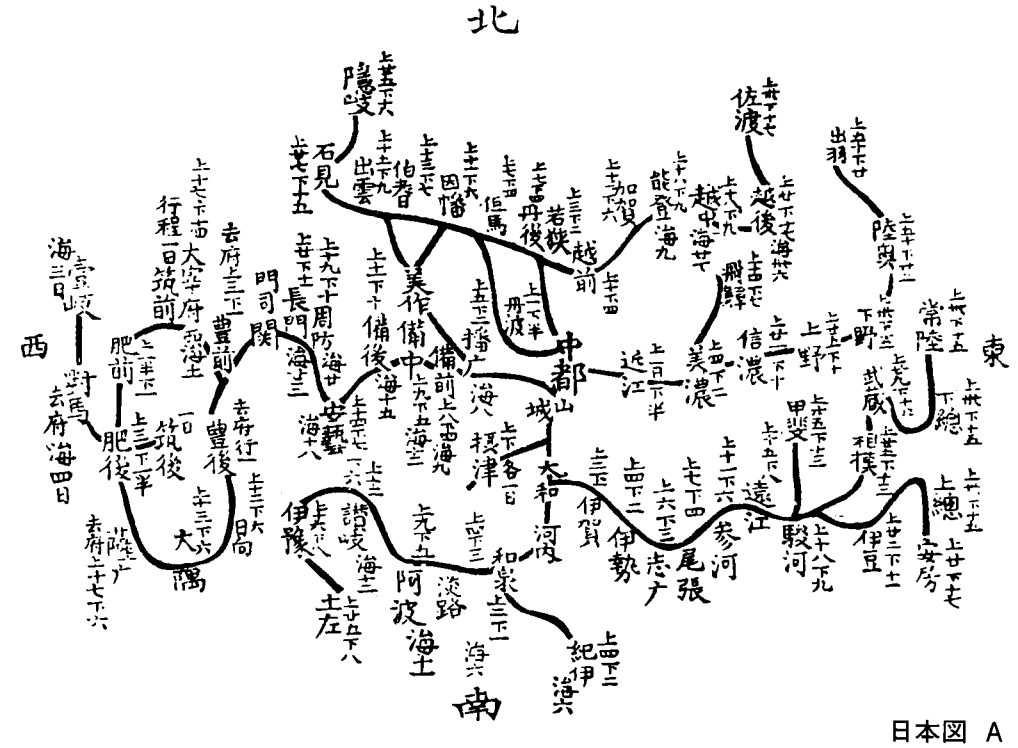
（裏）此ノ延刀ハ□□□（吉祥句）

読みの一例



「王賜」銘鉄剣

図6　千葉県市原市稲荷台1号墳出土「王賜」銘鉄剣
（市原市教育委員会蔵）



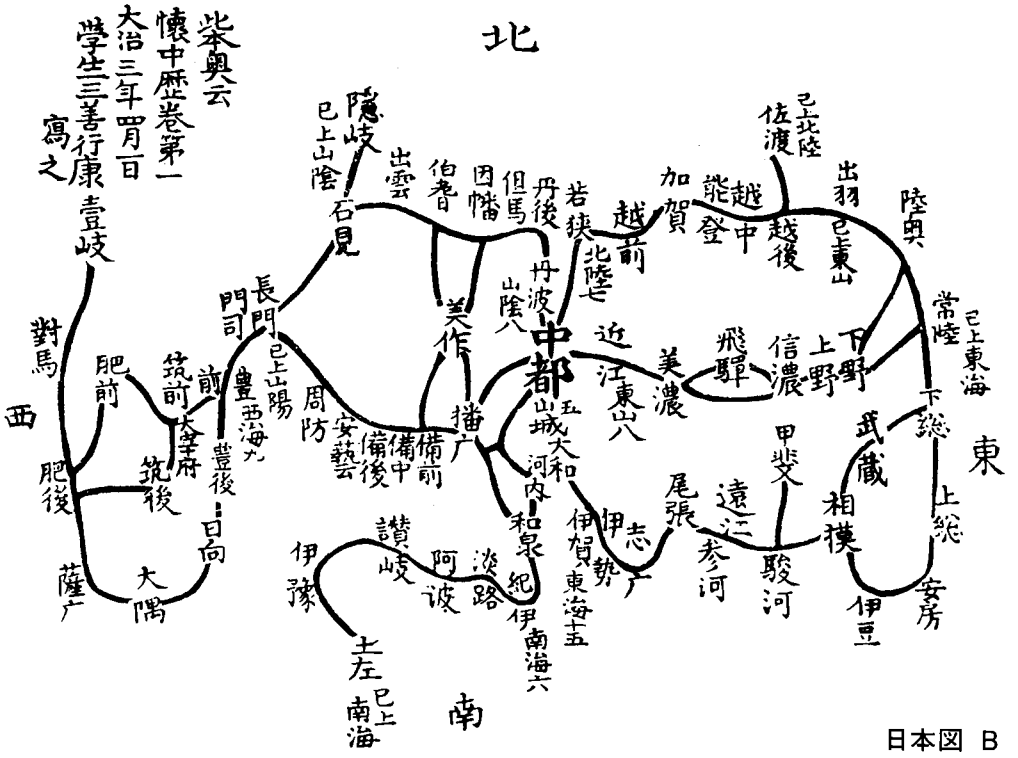


図7　『二中歴』所載の日本図（川尻秋生「古代東国の沿岸交通」より）

式に基づいて都への上りと下りの日数が記されている。そして、伊豆国から上総国を経由して安房国に到達する道が存在している。日本図Bでは相模・武蔵・下総・上総・安房・伊豆国が同心円状の道でつながり、伊豆国から安房国へ道が延びている。

以上から、十二世紀はじめには、相模・武蔵・下総国を経由せず、直接、伊豆国から房総半島に到達する海上ルートが存在したのであろう。

参考までに、房総から常陸への道は、次のように想定されている。

大脇保彦氏[12]によれば、『風土記』時代の主要ルートは下総から常陸への経路として香取道がより古い。そして、下総国於賦駅から流海を渡り、横谷駅に至った後の経路として、水路で直接国府の外港高浜（石岡市）あたりに達する場合と、霧ヶ浦東岸の曾禰（行方郡曾禰郷に比定）に渡海して、陸路を国府に向う場合を想定できるという。森田悌氏[13]は、八世紀前半には新東海道ができて、下総国府からまっすぐ陸路を北上して常陸国府に至るルートが確立したとみている。

❸地方豪族の地域間交流

——上総・武射地方と陸奥・牡鹿地方の交流[14]——

これまでの律令国家像は、それぞれの地域を支配してきた豪族たちの連携・交流あるいはその地域内の活動があまり注目されることなく、中央と地方との対比構図化してしまっているといえよう。律令国家においても、地方豪族の自立的活動と地域間交流の実態に着目しなければならない。

上記の交流ルートにかかわる上総国と陸奥国の豪族による地域間交流の実例をあげておきたい。

『続日本記』神護景雲三（七六九）年三月辛巳条

陸奥国白河郡人外正七位上丈部子老。賀美郡人丈部国益。標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人。賜二姓阿倍陸奥臣一。（中略）牡鹿郡人外正八位下春日部奥麻呂等三人武射臣。（中略）玉造郡人外正七位上吉弥侯部念丸等七人下毛野俯見公。並是大国造道嶋宿禰嶋足之所レ請也。

大国造道嶋宿禰嶋足の申請にもとづく陸奥国内の各郡領クラスの在地有力者の一括賜姓記事である。この賜姓を分類し、整理すると表1のようになる。

表1のとおり、すべて丈部・大伴部・吉弥侯部がそれぞれ阿倍・大伴・上（下）毛野＋陸奥国名または郡・郷名を賜姓したものであるが、牡鹿郡人春日部奥麻呂ら三人が武射臣を賜姓したのはここでは唯一の例外である。しかも、この一括賜姓の推挙者・道嶋氏がもとは牡鹿郡の豪族であることとも関連させると興味深いものがある。

ところで、この武射臣は右記の「地名＋臣」の型に一致すると思われ、

表1　陸奥国・郡・郷名を含む神護景雲3年賜姓一覧

丈部	→	阿倍陸奥臣	陸奥国
丈部直	→	阿倍安積臣	安積郡
丈部	→	阿倍信夫臣	信夫郡
丈部	→	安倍柴田臣	柴田郡
丈部	→	阿倍会津臣	会津郡
丈部	→	於保磐城臣	磐城郡
春日部	→	武射臣	
宗何部	→	湯坐曰理連	曰理郡
靱大伴部	→	靱大伴連	
大伴部	→	大伴行方連	行方郡
大伴部	→	大伴苅田臣	苅田郡
大伴部	→	大伴柴田臣	柴田郡
吉弥侯部	→	磐瀬朝臣	磐瀬郡
吉弥侯部	→	上毛野陸奥公	陸奥国
吉弥侯部	→	上毛野名取朝臣	名取郡
吉弥侯部	→	上毛野鍬山公	信夫郡鍬山郷
吉弥侯部	→	上毛野中村公	新田郡中村郷
吉弥侯部	→	下毛野静戸公	信夫郡静戸郷
吉弥侯部	→	下毛野俯見公	玉造郡俯見郷

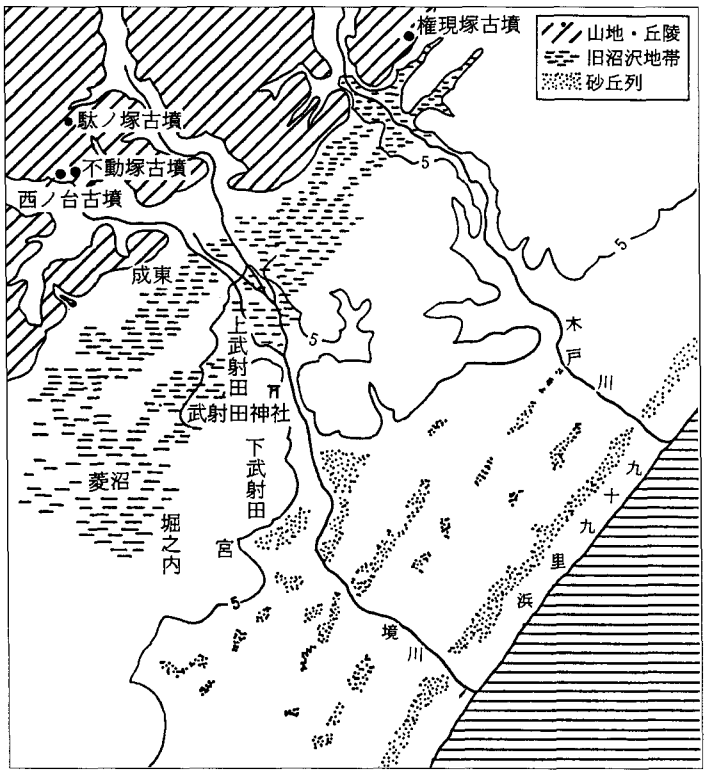


図8　九十九里沿岸地域の地形と古墳（角川源義「あづまの国」『古代の日本』7　関東より）

地名「武射」が上総国武射郡を指すことはほぼ間違いない。

上総国武射郡は現在の千葉県山武郡を中心とした九十九里沿岸に位置している。山武郡は地形からみると、下総台地の一部を占める等高線四〇～一〇〇mの洪積台地と、海蝕崖下に広く展開する等高線一〇m以下の九十九里海岸平野の二つの部分から成立している。九十九里浜海岸は蜿蜒六四kmに及ぶ弓状の海岸線に沿う一帯の砂浜海岸であるが、現汀線の砂丘背後には多くの沼沢群が点在している。九十九里浜沿岸の砂丘列をつくる西風は安房丘陵の北端にあたって、その造砂丘力を弱め、幻の入江をなしている。和邇氏の支族牟邪臣（武社国造）は木戸川と境川による入江を管理していたとされている。[15] 古代においては、日本各地の砂堆背後のラグーンのいくつかに港が成立していたことは周知のとおりである。[16]

平岡和夫氏のこの九十九里地域の古墳に関する調査によると、以下のとおりである。[17] 九十九里地域（千葉県香取郡栗源町・多古町・八日市場市・匝瑳郡光町・山武郡横芝町・松尾町・成東町・芝山町・山武町・東金市の範囲に包括される地域）の古墳は、群としては一四七群であり、古墳数では前方後円墳一一二基、方墳六八基、円墳八六八基の計一〇四八基が現存する。またすでに消滅し、その所在が確認された数を加えると一四四〇基にも及ぶ。古墳の分布域は、当該地域を流れる中小河川の北幸谷川・作田川・木戸川・栗山川の水系によって大きく分けることができる。九十九里地域の古墳は、五世紀半ばに出現する。五世紀後半から六世紀初頭までの古墳は、栗山川流域に集中し、六世紀後半は、古墳が本地域全域に爆発的に造営された時期であり、木戸川および作田川の支流の成東川・境川の流域では大型の前方後円墳や円墳が出現する。七世紀初頭には、成東川水系には駄ノ塚古墳のような大型の方墳が出現する。この駄ノ塚古墳は一辺約六〇m、高さ約一〇m、三段に築成された畿内の大王陵にも匹敵する大規模なもので、現在知られている方墳としては我が国では三番目の大きさである。[18]

神護景雲三年条にみえる「牡鹿郡人春日部奥麻呂」が姓「武射臣」を賜った事実は、さらに、次の点からもきわめて注目されるであろう。すなわち、大和朝廷による伊甚屯倉の設置との関連である。一般的には、大和朝廷の直轄領ともいうべき屯倉が関東地方に設置されたのは六世紀にはいってからとされている。[19] その一つ伊甚屯倉の設置について『日本書紀』安閑天皇元年四月の条には、次のような話をのせている。膳臣大麻呂というものが天皇の命をうけて使者を伊甚（現在の千葉県夷隅郡・勝浦市附近）へ遣わし、真珠を求めさせた。ところが、伊甚国造らは京にやってくるのが遅く期限までに真珠を朝廷に献上しなかった。そこで大麻呂は怒って、国造らを捕縛し、ことのよしを問うことにした。それ

をおそれた国造の伊甚直稚子らは、後宮の寝殿に逃げこんだ。そんなことを知らない春日皇后（仁賢天皇の女春日山田皇女）は、彼らのいるのをみて、息をはずませてあわてて、気絶してしまった。稚子直らは闌入罪（みだりに宮中に入った罪）にとわれることになったので、稚子直は、贖罪のため、皇后に伊甚屯倉を献じたという。佐伯氏は、後世、上総国夷灘郡には、春部直という氏姓のものがいる（『三代実録』貞観九〈八六七〉年四月廿日条「上総国夷灘郡人春部直黒主売」）ので、安閑天皇の時代に、春日皇后の名代である春日部がおかれ、屯倉も設置されたのは事実であったと思われるとしている。

この春日に深く関わるのが、ワニ氏である。ワニ氏の本拠は最初和爾の地（旧添丘郡櫟本町、現在の天理市）であったが、やがて少し北方の春日地方を本拠とし、その結果欽明朝ごろからワニ氏は春日氏と改めたようである。ことに春日皇后とよばれている安閑皇后の春日山田皇女は、その名代と考えられている春日部の分布からも、かなりの勢力をもっていたのではないかと考えられるという。[20]

結局のところ、神護景雲三年条にみえる春日部奥万呂は、おそらく上総国から海をわたって牡鹿郡に移住し、大きな勢力を有していた。そしてこの時点で、武射臣を賜姓したが、この春日部と武射の関連は、上述の上総地方の背景ときわめて合致して興味深い。

このような〝海の道〟をクローズ・アップすると、やはり先に掲げた『古事記』および『日本書紀』のヤマトタケルの東征伝承を想起せざるをえない。

『日本書紀』景行天皇四十年是歳条（既出）によれば、ヤマトタケルは駿河から相模を経て、東京湾を渡り上総に入った。そして上総から海路陸奥国へ向かったが、このコースこそ、上述のような上総から太平洋岸を北に向い、最終的には、北上川口―現石巻湾―に達したものと思われる。蝦夷賊首嶋津神・国津神等が屯した竹水門は、おそらく多賀水門すなわち現在の松島湾あたりを指したものかと考えられる。

仁徳天皇五十五年のいわゆる田道将軍の伝承はさらにこれに連なるものである。

蝦夷叛之。遣二田道一令レ撃。則為二蝦夷一所レ敗。以死二于伊寺水門一。

さきの景行天皇是歳条においてもヤマトタケル軍に対して蝦夷軍は、竹水門に屯していたのであり、この田道軍と蝦夷軍との戦闘も伊寺水門であった。この点は、八世紀後半から九世紀にかけての征夷軍と蝦夷軍が内陸部で戦闘を交わしている事実とはきわめて対照的である。このような中央の水軍と蝦夷軍の攻防が水門において行われたことに注目するならば、次のような重要な点を指摘できるであろう。

房総半島の武射地方の有力者と牡鹿地方との連繋、いいかえれば牡鹿地方の豪族道嶋氏の勢力伸長の基盤も海上交通との関連を考慮する必要があることを示唆している。また牡鹿地方の重要性はやはり陸奥国北部への海からの玄関口にあたっていた点にあるのではないか。八世紀半ばに造営された桃生城は牡鹿柵とともに、その玄関口と、港からさらに北上川水運を利用して北の内陸部―〝賊の本拠〟とされた胆沢地方―への物資輸送上の重要性を配慮したものと理解できる。

このように房総半島から陸奥への北上ルートが地方豪族による地域間交流としても活用されていたことを確認することができる。

❹墨書人面土器の受容ルート

1　墨書人面土器と道教的信仰

巽淳一郎氏は宮都出土の人面土器を主な対象としながら、その性格を次のように述べている。[21]

奈良時代の人面土器祭祀は、疫病が遠国あるいは疫病発生地から都城

図9　墨書人面土器の源流とされる道教の符籙の例
（『敦煌掇瑣』の録文）

への侵入を防ぐ目的で行われた国家祭祀であり、奈良時代末以降、おそらく新しい宗教（密教）の登場とともに墨書人面土器祭祀は次第にすたれ、それとともに個人的祭祀・民間祭祀へと変質していくという。

しかし、東国の人面土器は八世紀代のものも数多く確認されており、地方においても比較的早い時期から、在地の神（国神）などに対して、おそらく招福除災や延命などの祭祀が人面土器を用いて実施されていたと理解できる。その意味では、在地における人面土器祭祀は、国家祭祀が衰退して、民間祭祀へと変質した形のものであるととらえるよりは、従来からの在地における土着神に対する祭祀に、人面土器祭祀が比較的早い段階にとり入れられ、都での国家祭祀と重層的に存在したと理解すべきであろう。

ところで呪符について、墨書人面土器と関連して東野治之氏は敦煌発見の符籙を図した書物『護宅神暦巻』に注目し、次のように指摘している。[22]

『護宅神暦巻』の成立年代は盛唐より前に遡りえないが、このような符籙集は後代にも多く流布しており、これに先行する書が当然存在したと考えられるので、こうした書物を通じて呪符が受容されたことを想定してみるのは、大いに必要であろう。たとえば『護宅神暦巻』をみると、あげられた符籙の中に人面があるが、これらの人面は、おそらく日本の墨書人面土器に図された人面と顔を同じくするものであろう。すなわち、古代の人面は符籙の一種として位置づけることが必要であろう。

このような東野氏の見解は、墨書人面土器祭祀があらためて中国の道教をはじめとする複雑な信仰との関連を十分に想定すべきことを指摘したものであろう。

わが国においては、本来の神祇祭祀は個人信仰・現世利益の信仰を中心的な存在とはしなかった。むしろ、現世における長寿延命祈願などの息災と増益は、中国における密教と俗信道教との接点であった。

そこで、地獄の冥官―閻羅王と太山府君―に関して、中国におけるその思想形成過程について長部和雄氏の研究を要約して紹介しておきたい。[23]

仏教はインド教を包摂してできた民俗的な一宗教である。そして道教を包摂した唐の密教は民俗的な一宗教をつくりあげた。その典型例が閻羅と太（泰）山府君の関係である。

そもそも太山府君は、中国山東省の東嶽泰山の鬼神であるが、後漢のころ、泰山は死霊の赴く山で、そこには生籍と死籍とが備わっていて、司命の神がいるという信仰があったらしい。そして「六朝訳経」に説かれている太山地獄が東嶽泰山の地獄となった時点で、太山府君が司命の

神となった。

一方、閻羅は古代インドの死の神 yama が仏教の天部に移籍して、閻羅・閻摩・閻魔・焔摩・琰摩・炎摩となった。しかし密教の閻羅は本来南方の守護神であると解せられる。

六朝一般仏教では、閻羅は夙に冥界の鬼神となっているが、唐代には、太山府君と相並んではじめて閻羅が業道冥界の判官となっている。冥府とその信仰は仏教と関係なく、地獄を想定しているけれども、仏教の経文がさらに一枚加わり、太山地獄説に結びつき、閻羅王と太山府君が一緒に登場すること、これが中国地獄思想の主流となった。道教の太山府君は幽界地獄の審判官であって、天国浄土への済主ではない。一方、六朝・隋・唐では、道教と結びついた仏教は、死後の天国を説かないで、地獄だけを説く。これは極楽浄土思想が地獄思想ほど道教や仏教に浸透していなかったことを意味している。

わが国における冥道信仰は、やはり仏教説話集『日本霊異記』に、その具体的な内容を知ることができる。閻羅王が地獄の判官として人の生死を司るという信仰は、次の説話が最も端的にものがたっている。

官の勢いを仮りて、非理に政を為し、悪報を得る縁　下巻―三十五

白壁の天皇のみ世に、筑紫の肥前の国松浦の郡の人、火君の氏、忽然に死して琰魔の国に至る。時に王校ふるに、死期に合は不るが故に、更に敢へて返す。還る時に見れば、大海の中に釜の如き地獄有り。（下略）　　（『日本古典文学大系70　日本霊異記』岩波書店）

道教の泰山府君は仏教の閻羅王と習合し、人間の寿命と福禄を支配する神となった。側近に司命・司禄の二神を従えた。司命神は冥府の戸籍を管理し、戸籍に記載した年齢に達した者を冥府に召喚する。司禄神は娑婆にいる人々の善業悪業をすべて記録する神である。したがって、この説話のように一旦、閻（琰）魔王庁に召されても、その人物が司命神の管理する戸籍に記した年齢に達しないものは、「死期に合は不る」理由から閻羅王が裁断し、現世に返すことすらあったのである。

結局のところ、中国から持たらされた道教的な信仰は、和田萃氏が指摘するように民間の陰陽師らの活動によって民衆に定着したと考えられるであろう。[24]

2　墨書人面土器の分布

イ　静岡県三島市箱根田遺跡[25]

箱根田遺跡は静岡県三島市安久に所在する。三島市は伊豆半島の付け根部に位置し、古代、伊豆国府が置かれ、中世には伊豆一ノ宮の三嶋明神の門前町として発達し、近世には東海道の宿場町、南北・東西交通が交わる四つ辻として繁栄したのである。

箱根田遺跡は三島市南域、扇状地堆積物によって形成された田方平野の標高約一一ｍの低地に位置している。遺跡の所在する安久集落が位置する田方平野には古代条里制による地割が現在でも明瞭に確認できる地域である。また本遺跡の南東約二五〇ｍには大場川が大きく蛇行しながら南下している。

箱根田遺跡の調査では、河川跡一条と溝状遺構五条、掘立柱建物跡六棟、ピット一三二基、柱穴列一列が検出された。河川跡は調査区中央から南側調査区にかけて約八〇ｍにわたり検出され、川幅七～一二・五ｍの自然流路と考えられる。検出した河川跡に伴う遺物は八～十世紀初頭のものである。

箱根田遺跡からは、土師器坏や土師器小型甕を中心に、刻書や墨書を施したものが多数出土している。墨書人面は土師器坏三点、土師器甕一点、土師器小型甕六点、鉢二点である。墨書人面土器は、都で行われる「大祓」では甕型土器の中に息を吹き込むことで、自らの穢や病気を移し込め、甕ごと川に流す行事に用いられたと考えられている。都で行われていた甕型土器による墨書人面土器祭祀は、地方官人層が受容する段階

図10　墨書人面土器の分布

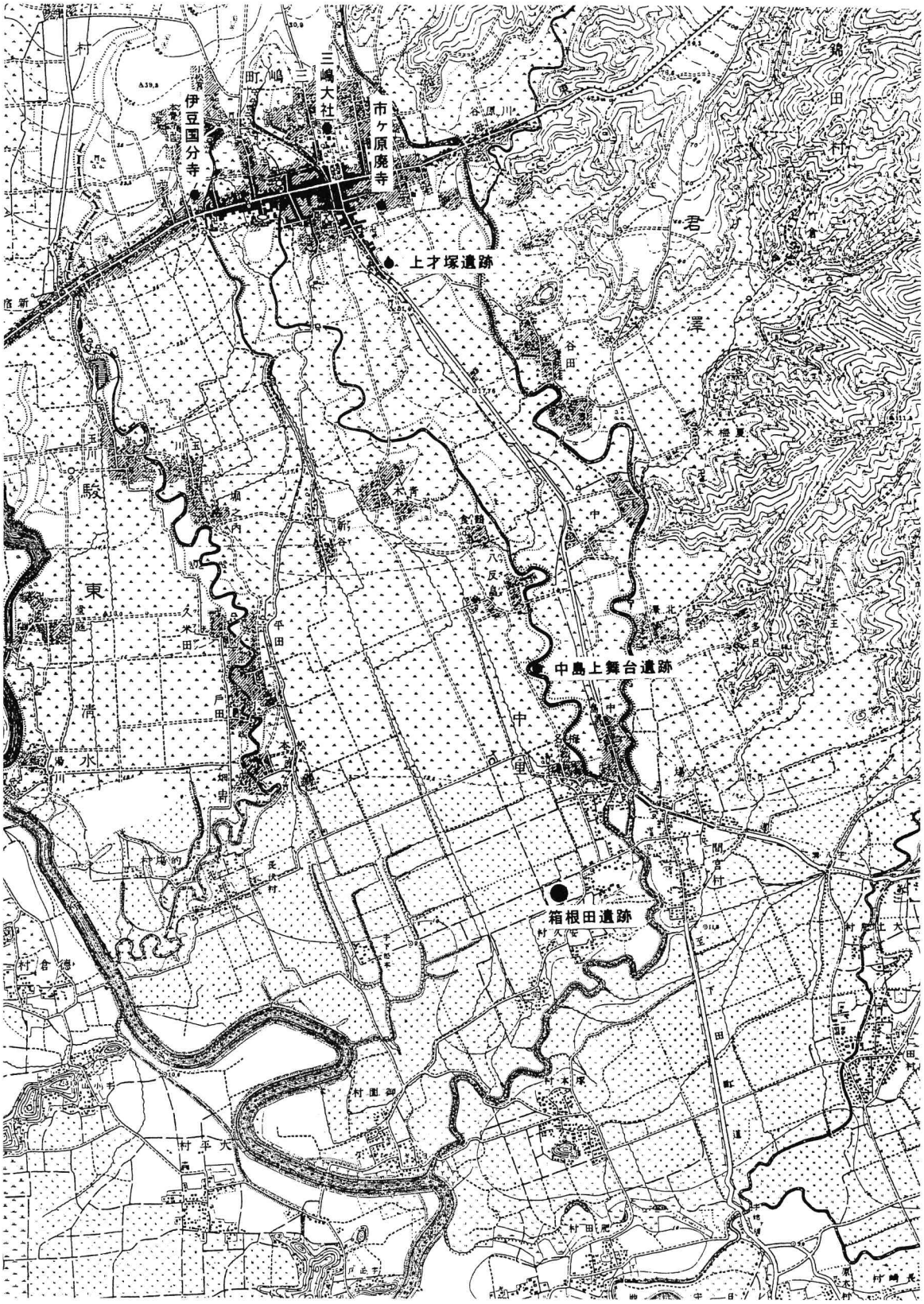
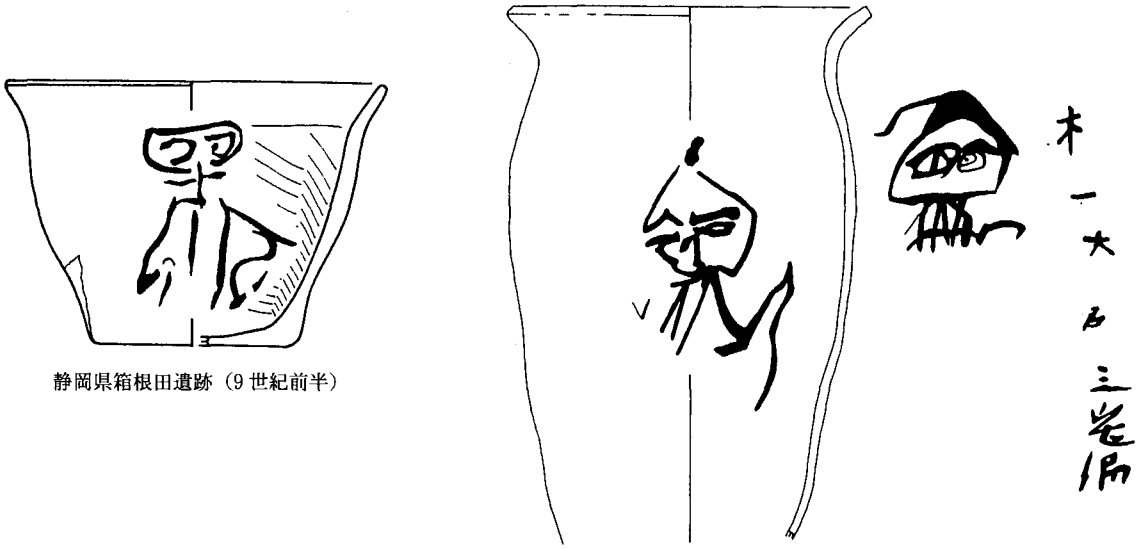


図 11　静岡県三島市箱根田遺跡の位置図（三島市教育委員会『箱根田遺跡』2003 年）



静岡県箱根田遺跡（9世紀前半）

神奈川県藤沢市南鍛冶山遺跡（8世紀中頃）

図12　墨書人面土器の類似例（その1）

で変容し、甕型土器だけでなく、従来の祭祀に用いられていた坏型土器にも人面を墨書するようになったとされている。本遺跡における甕型墨書人面土器の出現は、八世紀後半と考えられ、十世紀初め頃まで存続したとされている。自然流路内からは、舟形・人形・馬形・斎串などの祭祀木製品が出土している。

ロ　神奈川県内の人面土器[26]

○平塚市稲荷前A遺跡第8地点

九世紀前半の土師器坏に眉・目・鼻・口が描かれている。

○平塚市構之内遺跡第二地点

遺跡は相模国府域の西端に位置し、九世紀前半の土師器坏に顎がやや尖った顔の輪郭と眉・目・鼻・髭・口が描かれている。

○藤沢市南鍛冶山遺跡

遺跡は引地川下流域の高座丘陵右岸台地上に立地している。本遺跡は竪穴住居跡三三五軒、掘立柱建物跡一八四棟、特殊竪穴状遺構二基など多くの遺構が発見されている。また寺に関する墨書土器が多数出土している。

人面土器はまず、八世紀後半の土師器長胴甕と小型甕の二個体に人面が描かれている。長胴甕は胴部に人物が三人描かれ、さらに墨文字「相模国大住郡三宅郷」と記されている。小型甕は対になった人物が描かれている。

さらに九世紀後半の土師器坏の体部外面に髭・まつ毛と思われる三つの墨画が認められる。

○茅ヶ崎市香川・下寺尾遺跡群

遺跡は、高座丘陵西端の沖積低地砂丘列の最奥部に位置する。この一角は古代の「下寺尾寺院跡」と推定されている。九世紀前半の土師器坏の体部外面に顔の輪郭・目・鼻・耳が描かれている。

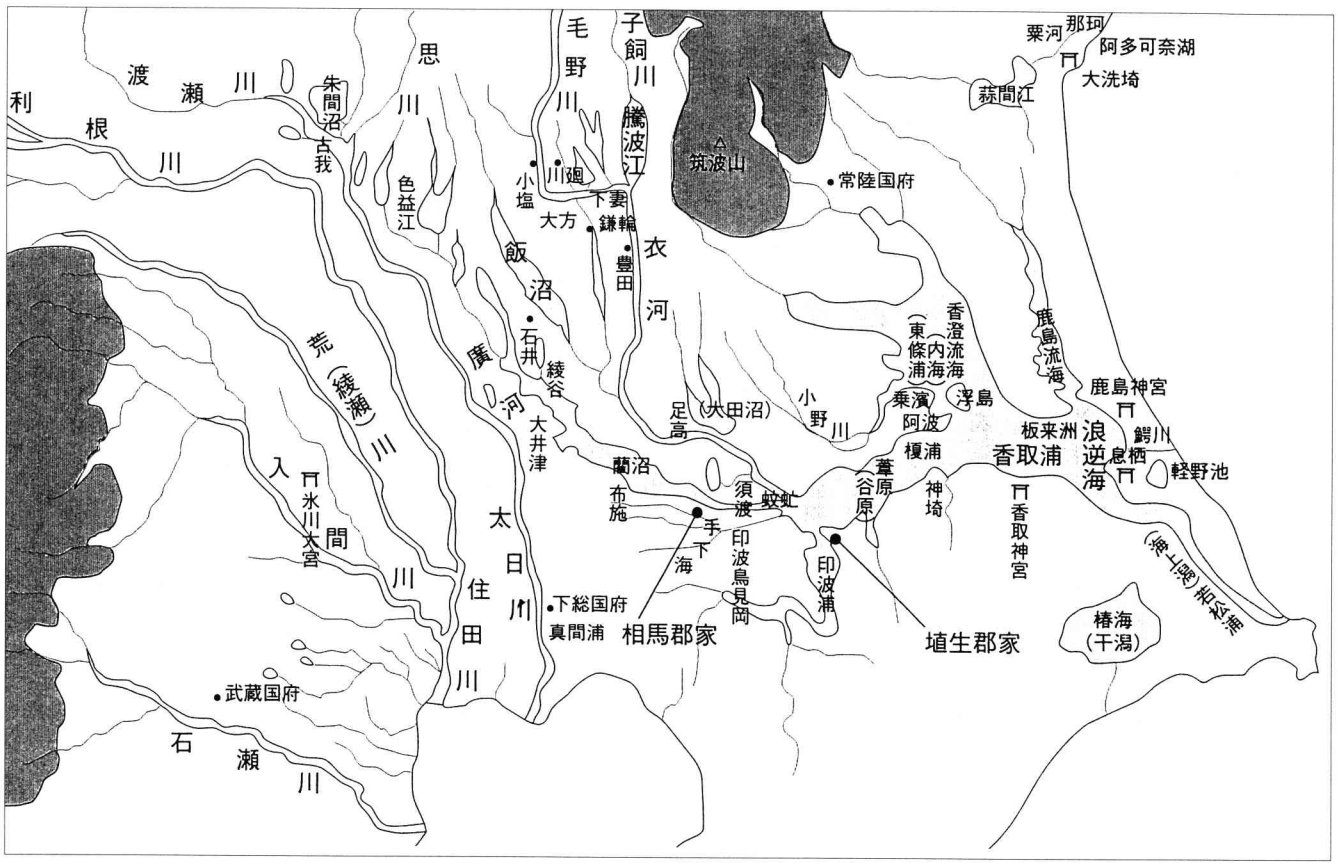


図 13　1000 年前の下総国周辺の陸と海（香取海）

○海老名市本郷遺跡

遺跡は相模川と目久尻川に挟まれた台地に位置している。本遺跡は竪穴住居跡三〇軒、掘立柱建物跡一八棟、特殊竪穴状遺構六基など多くの遺構が検出されている。九世紀前半の土師器坏に焼成後に刻書された顔・頸が描かれ、左側の顔側面から斜めに二本の刻線が施されている。

明石新氏は、これらの神奈川県内の人面土器の分析結果を次のように推論している。[27]

神奈川県で出土した人面土器は、すべて相模川右岸・左岸の大住郡・高座郡から出土している。古墳時代後期の段階では相模川中・下流において、古墳が他の地域より卓越的に存在しており、また律令国家体制下でも国府や国分寺が設置された相模国の中心的地域である。律令期の大住郡・高座両郡の大領は、ともに「壬生直」であることから、人面土器の有力な受容主体と理解している。

ハ　〝香取の海〟と人面土器

古代には、霞ヶ浦・北浦から印旛沼・手賀沼にまで通ずるひと続きの大きな内海があり、下総国香取地方から西にかけては「香取の海」と呼ばれていた。下総国香取神宮（千葉県佐原市）は常陸国鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）とともに、朝廷によって東国を鎮める神々として重要な役割を与えられていた。香取の神は、もともと下海上国造（現在の銚子市を中心とする地域の豪族）が崇拝した神であり、『日本書紀』にも「この神は今東国の楫取の地にあるなり」とあるように、「香取（かとり）」は「楫取（かじとり）」のつまった語で、船の航行を司る神として信仰されていたのである。

この〝香取の海〟の西部一帯は、印波国造の勢力下にあった。六世紀段階では公津原古墳群（成田市）の被葬者が優勢であったが、七世紀に

入ると岩屋古墳（大王陵にも匹敵する巨大古墳）をはじめとする竜角寺古墳群（印旛郡栄町）の勢力が圧倒するのである。川尻秋生氏は平城京跡出土木簡に着目し、下総国埴生郡の郡領氏族を「大生（部）直」とみて、以下のように論を展開した。[28] その竜角寺古墳群を築造した印波国造は「大生部（壬生）」氏というウジを名のったと考えられる。そもそも大生部（壬生）氏は大和朝廷と密接な関係がある氏族で、香取郡内にも分布していたことが知られている。このことから推測するに、竜角寺古墳群に埋葬された豪族は、香取神宮と同様に大和朝廷と強く結びついていたのではないかと指摘している。

ところで、印波国造の支配した領域は、七世紀後半になると、埴生評（郡）と印波評（郡）の二つの評（郡）に分かれたと考えられる。竜角寺の地は、八世紀にはわずか四郷からなる埴生郡とされた。一方、埴生郡の南と西に展開した印波郡は、現在の成田市・佐倉市・八千代市・印西市などに相当する地域が含まれ、一一郷からなる大きな郡であった。

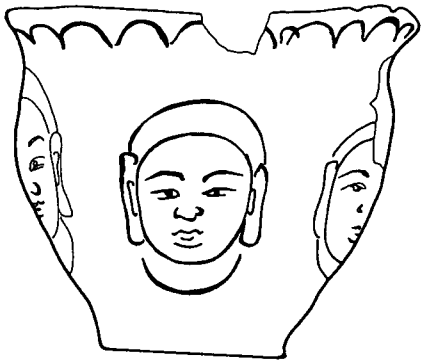
印波国造領域を二つの評に分割した当初は、おそらく印波評は埴生評とほぼ同規模であったと考えられる。そののち、印波郡は東部に加えて西部を新たに開発し、香取の海やその海に注ぐ大小の河川の流域を望む台地の縁辺部にまで多くの集落を営んだと思われる。そして印波郡の郡領の氏族名は「丈部直」と考えてよい。

この香取の海一帯は水上交通によって密接に結びつき、一つの文化圏を形づくっていたようである。文字や人面を墨書した土器が、全国の他の地域に比して、圧倒的に数多く出土している。通常、墨書土器は一、二文字しか記されていないが、[29] この香取の海一帯では多文字、なかには文章になっているものもある。

○八千代市上谷遺跡　土師器甕胴部外面
　人面墨書[30]
「下総国印播郡村神郷
　丈部□刀自咩召代進上
　延暦十年十月廿二日」
○富里市久能高野遺跡群　土師器坏体部外面
「罪司進上代」
○印西市鳴神山遺跡　土師器甕胴部外面
「国玉神上奉丈部鳥万呂」
○山武郡芝山町庄作遺跡　土師器坏
　内面人面墨書
　体部外面「丈部真次召代国神奉」
○同遺跡　土師器甕胴部外面
　人面墨書
「罪ム国玉神奉」
○印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡　土師器坏体部外面（三点）
　①□□□命替神奉
　②□□□□命替神×
　③×□□□奉

国玉神（国神）について、たとえば、『伊勢国風土記』逸文・度会郡の項で、天日別命（天神）に屈伏する大国玉の神（国神）の姿が描かれている。天神については、東国でみるならば、『常陸国風土記』香島郡の項に、鹿島神宮の御舟祭の縁起を記す中で、鹿島神宮の神は「天の大神」（天神）と表記されている。国神については、『古事記』における天神・国神概念と異なり、ここでは高天原の神＝天神に対して、在地の神一般を指すものと理解したい。

庄作遺跡の「丈部真次召代国神奉」の解釈は、丈部真次が召される代わりに国神に饗応することを意味しているといえよう。その解釈の傍証が長勝寺脇館跡の墨書土器「命替神奉」であり、「命替」は、「召代」が〝冥界に命を召される〟とする理解からすれば、ほぼ類似した表現とみな



静岡県箱根田遺跡（9 世紀前半）

千葉県佐倉市八木山ノ田遺跡（8 世紀後半）

図 14　墨書人面土器の類似例（その 2）

すことができるのではないか。

結局のところ、〝香取の海〟一帯から出土する人面墨書と多文字墨書土器については次のように推論することができるであろう。

中国において、冥道世界は、中国古来の俗説とも、仏教とも、道教とも、一般信仰ともつかぬ混合した様相を呈していた。したがって、わが国にはおそらくはそのような混合した相のものが、ほぼそのまま受け入れられ、さらにわが国の古来の信仰とも交わり、複雑な形態をなしたと考えられる。その信仰の展開過程は、墨書土器でみるかぎり、八世紀段階には東国社会に浸透しており、中央と在地社会への受容にそれほど時期差はないのではないか。

一方、祭祀内容については、これまで招福、除災という側面が強調されてきたが、現世利益におけるもう一面として〝延命〟もまた古代人の強い願望であったことを数多くの墨書土器から鮮明に知ることができよう。

複雑に混合した信仰とはいえ、外来の新しい信仰形態は在地社会には異様に映り、その現世利益の立場からは、人々のきわめて強い関心を集めたものと推察される。その新しい信仰形態は、自然な形で村々に浸透したのではなく、おそらく、在地における特定の受容主体、いいかえればそれらを司祭することが在地社会における支配イデオロギーにつながるものではなかったか。

〝香取の海〟周辺の墨書土器に記された祭祀の主体と考えられる人物は〝丈部〟というウジ名が圧倒的多数を占めている。このことと、これらの墨書土器の出土地域においては、いずれも丈部（直）が郡領氏族または有力氏族である点とは無関係ではないであろう。

おそらく印波地方の豪族「丈部直」は、中国からもたらされた道教色の強い人面土器を用いた異様な祭祀を積極的に受け入れ、香取の海一帯に広めたと推測される。もしかすると、特異な祭祀の受容は、天神であ

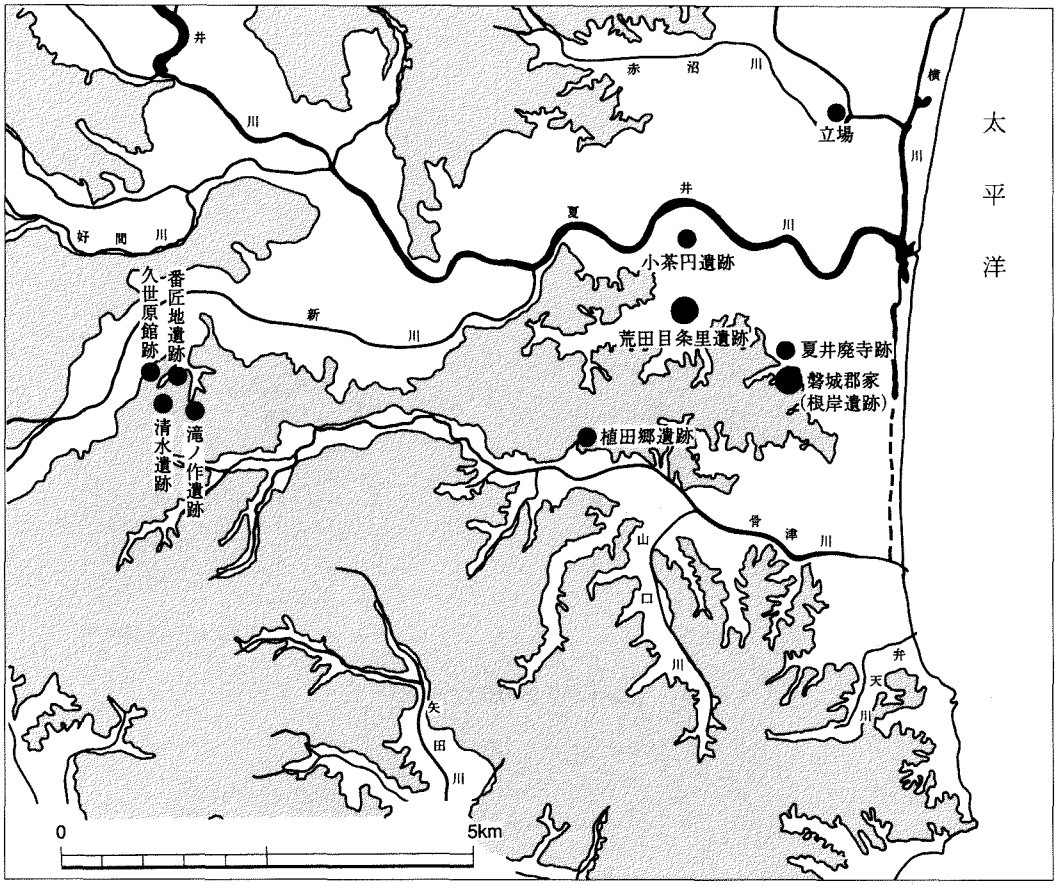


図15　太平洋・夏井川と荒田目条里遺跡の位置図（いわき市教育委員会『荒田目条里遺跡』2001年）

る香取神宮とその勢力に対する一つの対抗の姿かもしれない。

このように古代の香取の海一帯の特異な墨書土器文化圏こそが、伊豆半島の箱根田遺跡そして相模湾に望む相模川沿いの南鍛冶山遺跡などを経由してもたらされたものではないか。

3　福島県いわき市荒田目条里遺跡の人面土器[31]

荒田目条里遺跡は、夏井川下流の右岸に位置し、太平洋の海岸より西へ約二・五㎞の所にある。夏井川下流域の海岸平野には、現海岸線を除いて、四列の浜堤列が認められる。その西と東を第一浜堤、第二浜堤、北を夏井川の自然堤防に囲まれた後背湿地が条里地割の水田である。本遺跡の南東方向へ約一・五㎞の所に磐城郡家の中心施設に比定される根岸遺跡がある。

荒田目条里遺跡は古代の水田跡を含む郡家関連施設と考えられる。古代の幅一六m以上にわたる河川跡の中から祭祀遺物を中心に多様な遺物が出土した。木製品では、木簡三八点をはじめ、絵馬三点や人形・馬形など四〇〇点ほど出土している。

本遺跡出土の墨書土器約二九〇点のなかに、文字を伴う墨書人面土器と多文字墨書土器がそれぞれ一点ずつ出土している。

墨書人面

「磐城□磐城郷丈部手子麿　召代」　（八世紀後葉）

この文型は、次の八千代市白幡前遺跡の土師器甕胴部外面の墨書と類似している。

墨書人面

「丈部人足召代」

「多臣永野麿身代」　（九世紀中葉）

この文型も、次の三島市箱根田遺跡の土師器甕胴部外面の墨書と類似している。

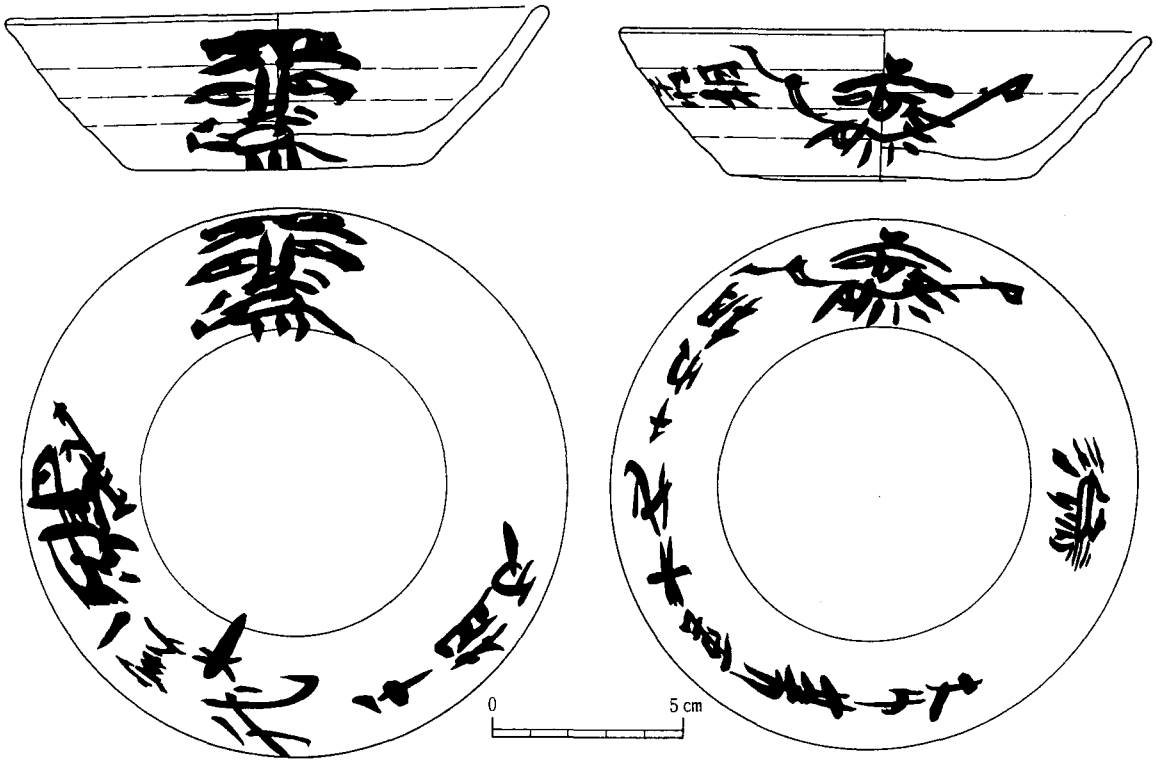


図16　多賀城・城辺遺跡出土墨書人面土器（8世紀後半～9世紀前半）

「新刀自女身代」

4　多賀城・城辺遺跡の人面土器[32]

多賀城の南西に広がる微高地には、南北大路と東西大路と呼ばれる二つの幹線道路を基準に方格地割の町並みが展開している（多賀城の前面に広がる遺跡群をここでは城辺遺跡と称すこととする）。

墨書人面土器は、東西大路北側溝および砂押川の旧河道から集中して検出され、約一〇〇個体が出土している。人面土器を用いた祭祀が、おもに大路を中心とした道路の交差点や河川で執り行われていた。人面土器には土師器甕と須恵器坏が利用されているが、都城における祭祀の手法のみを採り入れ、日常的な大小の甕や坏を祭祀具としたものと思われる。年代については、出土状況からみて八世紀末から九世紀前半頃のごく短い期間に限定される可能性が高い。

ところで、箱根田遺跡から荒田目条里遺跡までの経路で確認されている墨書人面と文字を伴う墨書土器は、本遺跡でも河川跡から六点出土している。

○須恵器坏
墨書人面
「室子女代千相収」

○須恵器坏
墨書人面
「丈部弟虫女代千収相」

なお、墨書人面こそ欠くが、呪符を内容とする文書土器も出土している。

・口上（外面体部）
・平（外面底部）
・　此鬼名中六鬼知（内面）

申日病人「(符籙)」急々如律令
寅年人□□里□鬼神知也
即顕腹取□

以上、箱根田遺跡から多賀城・城辺遺跡までの墨書土器では、次のような点が指摘できよう。

墨書人面土器は、伊豆半島の付け根の三島市箱根田遺跡から相模湾(湾にそそぐ相模川沿いの南鍛冶山遺跡など)、ついでおそらくは三浦半島の付け根を経過し、東京湾を渡り、房総半島の〝香取の海〟、さらに北上し、いわき市荒田目条里遺跡そして終着地として多賀城の城辺遺跡という海上ルートを経由していることが確認できたといえよう。ただし出土した墨書土器の個々の時期は、必ずしも西から東への伝幡ルートに沿ったものではないが、右のような伝幡ルートの想定は十分に成立ちうるであろう。

むすびにかえて——鎌倉は東の海上ルートの中継点——

三浦半島の付け根部分の逗子市と葉山町境で発見された四世紀の長柄・桜山古墳は、その対岸の房総半島の富津・木更津・市原などの東京湾岸地域の四〜五世紀の古墳と密接に連動するものである。すなわち、ヤマト王権の東国支配が、古東海道ルートに沿うことをみごとに証明したのである。

ところで『古事記』『日本書紀』のヤマトタケル伝承の道は、焼津から伊豆半島を横切り、相模湾・走水そして上総を経て北上するコースである。

また、その伊豆—相模—上総という経路は、国司着任・離任の公的コースであることが平安後期の文献史料でも確認される。

さらに墨書人面土器という道教的色彩の濃い祭祀も、近年の発掘調査成果によれば、伊豆半島の付け根の三島の地から相模そして房総の〝香取の海〟さらに北上し、磐城・多賀城に至る伝来ルートが明らかとなってきている。この人面土器祭祀は、在地の豪族層が中国から伝わった道教的祭祀と在地神などを巧みに融合させた特異な形態を有するものである。在地の豪族層が特異な祭祀を積極的に受容・形成することにより、地域民を宗教的に支配したと考えられる。それ故に、その伝来コースが上記の伊豆—相模—房総という経路と合致する傾向は注目に値いしよう。

以上のような古墳時代以来、歴史的に長期にわたり、脈々として形成されてきた伊豆—相模—房総という海上ルートは、政治・経済・軍事・文化など多岐にわたる要素を伝来させたものであることが、上記の事例でほぼ立証されたといえるであろう。

そのうえ、伊豆—相模—房総—陸奥に至るコースは、最短の直線的海路・陸路を通ることが確認できたと判断できよう。

すなわち、伊豆半島の付け根・三島から相模湾を通り、三浦半島に向う。さらに走水を渡るのであるが、走水は従来の三浦半島の南、横須賀市走水の比定地ではなく、長柄・桜山古墳の位置する半島の付け根(現逗子市と葉山町の境)を東西の方向に谷が最も奥深く開析している田越川流域を遡上した東京湾側の地点の延長上の海上を比定できるのであろう。その地点は、東京湾の三浦半島と房総半島の最も至近距離の海上と考えられ、走水を渡り、対岸の富津岬に上陸するコースと想定される。すなわち富津岬が突き出た付近は潮の流れが速く、複雑にうねるいわば難所ではなかったか。最短距離は危険個所でもあり、それが『古事記』『日本書紀』の走水と弟橘媛の伝承を生む素地となったのであろう。

中世には鎌倉の七里ヶ浜が港湾機能を失うと東京湾側の六浦がその役割をとって代わるが、その六浦は対岸の富津と頻繁な交流を行なっていたことが知られている。

次に問題となるのが、房総半島を通過するコースである。

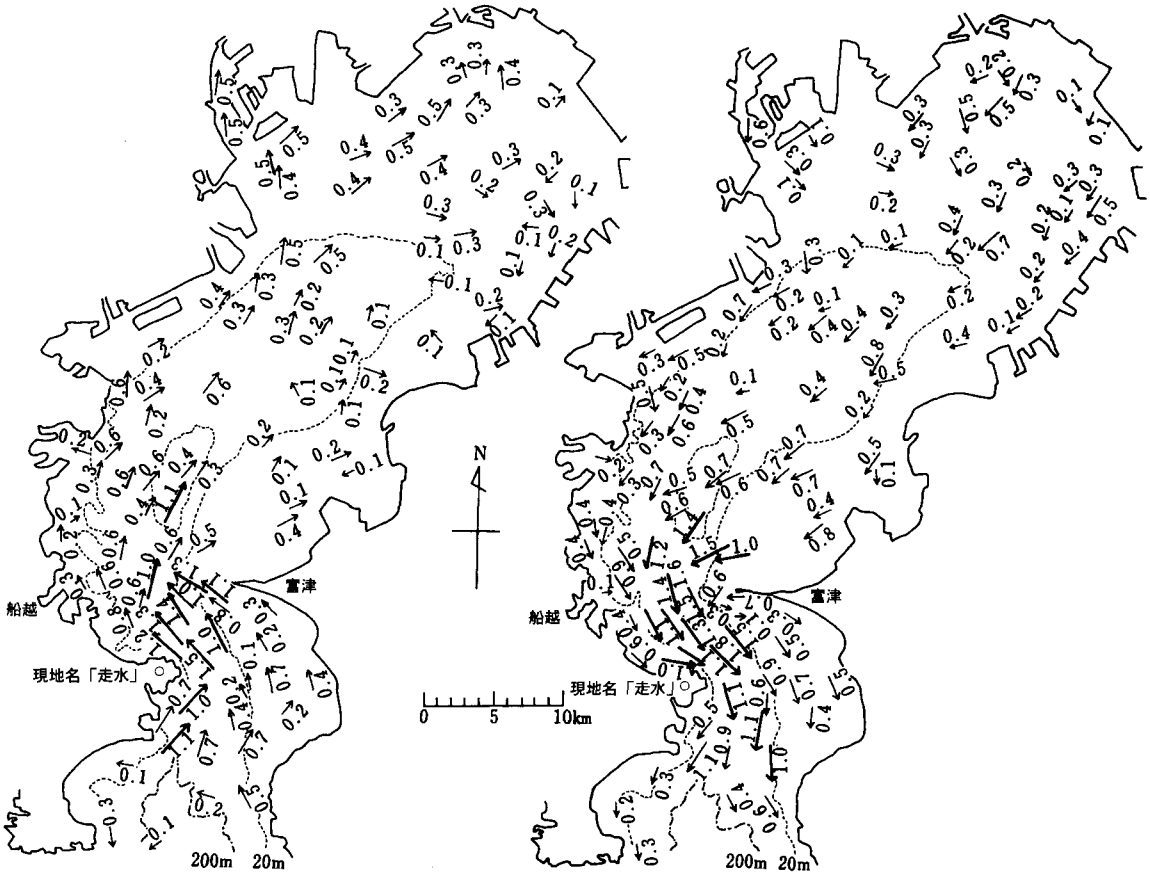


図17　東京湾の潮流（湾口最強時、単位ノット）　左：上げ潮，右：下げ潮，水路部の潮流に基づいて作成。
（宇野木早苗「東京湾の水の流れ」　貝塚爽平編　東京湾シリーズ『東京湾の地形・地質と水』築地書館，1993年より）

ヤマトタケル東征伝承は、『日本書紀』によれば、往路は上総から陸奥国へと北上し、帰路は常陸から甲斐へ向うコースがとられている。

従来は、前段の上総→陸奥を後段で詳細に記述したのが、葦浦→玉浦→蝦夷の境と理解していたと考えられ、『日本書紀』の「玉浦」を『和名類聚抄』下総国逊瑳郡「珠浦郷」に比定し、房総半島の先端をまわるコースが設定された。

しかし『日本書紀』の該当記事は、〝上総→陸奥国→葦浦→玉浦→蝦夷の境〟という順の経路となっており、葦浦・玉浦は陸奥国内に比定されるべきであり、逊瑳郡「珠浦郷」比定の根拠は成り立ちがたい。

走水から房総半島に上陸したのちのコースは、最短の直線的経路を想定すべきであろう。おそらく東京湾沿岸の地（現富津・君津・木更津・市原市）を経由して、〝香取の海〟から海路を北上するコースが最も妥当なものと考えられる。

源頼朝は伊豆で挙兵し、相模湾の真鶴そして三浦半島さらに房総半島という半島をつなぐ海上ルートを重要な活動拠点としていること、その海上ルートの中心に位置していたのが鎌倉の地である。しかも鎌倉の地は、三方を山に囲まれ、軍事的条件をも備わっていた。そのうえ、鎌倉の地は歴史的に確固として形成され、多様な交流ルートとなった古東海道コースの中継点であったのである。

こうして鎌倉に武家政権の幕府を設定させる条件は十分に整ったと理解することができるであろう。

註

(1) 五味文彦「京・鎌倉の王権」(五味文彦編『京・鎌倉の王権』日本の時代史8、二〇〇三年)。
(2) 斎藤直子「中世前期鎌倉の海岸線と港湾機能」(峰岸純夫・村井章介編『中世東国の物流と都市』山川出版社　一九九五年)。
(3) 註(2)と同じ。
(4) 柘植信行「開かれた東国の海上交通と品川湊」(網野善彦・石井進編著『中世の風景を読む　第二巻　都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社　一九九四年)。
(5) (財)かながわ考古学財団『平成11年度、発掘調査成果発表会　公開セミナーかながわの出現期古墳を探る　発表要旨』二〇〇〇年一〇月。のち、神奈川県教育委員会・財団法人かながわ考古学財団『長柄・桜山第一・二号墳—測量調査・範囲確認調査報告書』(二〇〇一年)が刊行され、ほぼ同様の報告が記述されている。
(6) 白石太一郎「東日本のなかの長柄・桜山第一・二号墳」(註(5)の発表要旨に所収)。
(7) 註(5)の報告書。なお、注目すべき点は、白石氏が発表要旨の最後に次のように結んでいることである。
「後に東国の武家政権の本拠地が鎌倉に置かれるのも、古墳時代初期にこの地域が果たした、畿内と関東東部、さらに東北地方とを結ぶ要衝としての重要な役割と決して無関係ではなかろう」
(8) 『古事記』『日本書紀』の該当条について、藤沢市教育委員会編『神奈川の古代道—博物館建設準備調査報告書　第3集—』(一九九七年)において、特に相模国内のルートについて詳細に検討を行っておるので、参照されたい。
(9) 佐々木虔一『古代東国社会と交通』校倉書房　一九九五年など。
(10) 小林三郎「関東の古墳と地域首長の成立」(『新版　古代の日本　第8巻　関東』所収、角川書店　一九九二年)。
(11) 川尻秋生「古代東国の沿岸交通—中世との接点を求めて—」『千葉県立中央博物館研究報告—人文科学—』第五巻第二号、一九九八年。
(12) 大脇保彦「常陸国」(藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅰ』大明堂　一九七八年)。
(13) 森田悌『古代東国と大和政権』新人物往来社　一九九二年。
(14) 武射の豪族と牡鹿地方との海上を通じての交流については、拙稿「海道・牡鹿地方」(石巻市史編さん委員会『石巻の歴史』第六巻　特別史編　一九九二年)に詳細に述べているので参照してほしい。
(15) 角川源義「あづまの国」(『古代の日本』第七巻　一九七〇年)。
(16) 日下雅義『古代景観の復原』中央公論社　一九九一年。
(17) 平岡和夫編『千葉県九十九里地域の古墳研究』一九八九年。
(18) 国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告　千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』第六五集　一九九六年。
(19) 佐伯有清「子代・名代と屯倉」(『古代の日本』第七巻　一九七〇年)。
(20) 岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」(『日本古代政治史研究』所収、塙書房　一九六六年。
(21) 巽淳一郎「都城における墨書人面土器祭祀」(『月刊文化財』三六三号　一九九三年)。
(22) 東野治之「木簡雑識」(『長屋王家木簡の研究』所収、塙書房　一九九六年)。
(23) 長部和雄「唐代密教における閻羅王と太山府君」(神戸女子大学東西文化研究所『唐宋密教史論考』一九八二年)。
(24) 和田萃「日本古代国家と道教的信仰」(菊池康明編『律令祭祀論考』塙書房　一九九一年)。
(25) 三島市教育委員会『箱根田遺跡発掘調査報告書』二〇〇三年。
(26) 神奈川県内の人面土器については、最近まとめられた明石新「人面墨書土器考—神奈川県出土の人面墨書・刻書土器について—」(村田文夫先生還暦記念論文集『地域考古学の展開』所収、二〇〇二年)を要約したものを掲げた。
(27) 註(26)に同じ。
(28) 川尻秋生「大生部直と印波国造—古代東国史研究の一試論—」(『古代東国史の基礎的研究』所収、塙書房　二〇〇三年)。
平城京左京二条大路出土木簡
「左兵衛下総国埴生郡大生直野上養布十段」
長さ一七三×幅二一×厚さ三㎜　〇三二型式
(『平城宮発掘調査出土木簡概報』二四)
(29) 拙著『墨書土器の研究』吉川弘文館　二〇〇〇年。
以下、墨書土器全般に関わる点は、拙著を参照してほしい。
(30) 八千代市立郷土博物館『八千代市立郷土博物館報』No.26、二〇〇一年十一月。
(31) いわき市教育委員会『いわき市埋蔵文化財調査報告第七五冊　荒田目条里遺跡』二〇〇一年。
(32) 宮城県教育委員会『宮城県文化財調査報告書第一七〇集　山王遺跡Ⅲ　多賀前地区遺物編』一九九六年。

(二〇〇三年五月二十三日受理、二〇〇三年七月十八日審査終了)

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

The Time before the Establishment of the Medieval City of Kamakura: the Real State of the Eastern Sea Route

HIRAKAWA Minami

Why was the shogunate of the Middle Ages established in Kamakura? We may assume that historically a sea route had been developed which passed through Kamakura. The purpose of this paper is to examine this historical route.

The Nagae-Sakurayama tumulus discovered recently at the base of the Miura Peninsula provides clear evidence of a distribution route from the Miura Peninsula to the Boso Peninsula during the early part of the Kofun Period during the fourth and fifth centuries. Further, earthen ware with ink painted faces suggestive of a strong Taoist influence that date from the eighth and ninth centuries have been found at the Hakoneda archaeological site at the base of the Izu Peninsula and have been found with the widest distribution at the archaeological sites that form the "Katori-no-umi" belt that spans from Sagami Bay through to the Boso Peninsula. They have also been found further north in the area that extends from the Iwaki region of the former province of Mutsu to Taga-jo where the provincial capital located. According to documents from the end of the Kofun Period, the sea route from Sagami to Kazusa was also officially recognized when there was an exchange of officials.

This route corresponds to the course taken by Yamato Takeru for his "subjugation of the east" as recorded in the Kojiki (Record of Ancient Matters) and the Nihon Shoki (Chronicles of Japan). This is said to be the old Tokaido route.

An examination of the examples mentioned above has revealed that the introduction of politics, military, commerce and culture from Yamato to the east made use of the shortest sea route that went from the Izu Peninsula to the Miura Peninsula to the base of the Boso Peninsula.

Kamakura was an intermediate point on this sea route that facilitated the exchange of people and distribution from west to east. Sited as an intermediate point for this sea route the Kamakura shogunate of the Middle Ages, was highly active in movements toward the west and the east.